

ISSN 1880-7925

花園大学国際禅学研究所

論叢

第十二号

2017年3月

花園大学国際禅学研究所

花園大学国際禅学研究所論叢

第十二号

二〇一七年三月

ANNUAL REPORT
of the
INTERNATIONAL RESEARCH
INSTITUTE FOR ZEN BUDDHISM

No. 12

Table of Contents

Gettan Dōchō's Annotated Edition of the <i>Ōbaku Sotoku Ju</i> LIN Guanchao.....	1
A Compilation of Kamakura-era Tea Records from the Zen School: With Japanese Readings and Annotation TACHI Ryushi.....	27
An Annotated Transcription of the <i>Kōyūjō</i> : Letters from Scholars to Uemura Kankō in the Taishō Era HORIKAWA Takashi.....	161
Views on Women in Japanese Zen: The Case of Zen Master Hakuin (3) TAKESHITA Ruggeri Anna.....	(1)

March 2017

花園大学国際禅学研究所

論叢

第十二号

目次

月潭道澄の『黄檗祖徳頌』標註……………	林 觀 潮……………	1
鎌倉期禅僧の喫茶史料集成ならびに訓註(上)……………	館 隆 志……………	27
上村観光来簡集『交遊帖』解題と翻刻……………	堀 川 貴 司……………	161
執筆者一覧……………	……………	183
日本の禅宗における女性観 ―白隠禅師の場合―(3)……………	竹 下 ル ッ ジ エ リ ・ ア ン ナ……………	(1)

月潭道澄『黄檗祖徳頌』標註

林 觀 潮

目 次

- 一、解題
- 二、『黄檗祖徳頌』標註
- 三、『黄檗祖徳頌』の複写本
- 四、隠元禪師の生涯

一、解題

『黄檗祖徳頌』は初期黄檗宗の僧である月潭道澄（一六三六―一七一三）が開祖の隠元禪師（二五九二―一六七三）を讃えた詩作である（一）。

月潭は江州彦根（滋賀県彦根市）の出身で、十二歳で京都瑞石山永源寺如雪文和尚の座下に出家した。

慶安四年（一六五二）春より、洛西嵯峨翔鳳山直指庵（京都市右京区北嵯峨北の段町三番地）の独照性円（一六一七―一六九四）に参じた。承応三年（一六五四）七月に独照と共に長崎興福寺へ隠元禪師に参じ、それから

二十年間隠元の侍者を務め、その法化を助けた。隠元示寂の前日、寛文十三年（二六七三）四月二日に京都黄檗山萬福寺で独照に法を嗣ぎ、隠元の法孫となった。

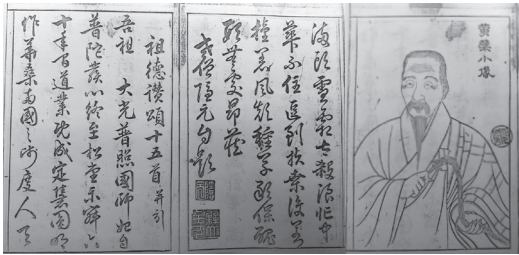
延宝三年（一六七五）四月、隠元のために三年の服喪を終え、京都黄檗山萬福寺を離れて直指庵に帰り、首座として独照を助けた。元禄七年（二六九四）九月、直指庵の二代住持を務め、その後そこに法を弘め、長老の僧として黄檗宗の内外から尊敬を集めた。同じく隠元の侍者を務めた齊雲道棟（二六三七—一七一三）を生涯無二の法友とした。

正徳三年（一七一三）三月、直指庵で菩薩戒会を三日間営み、僧俗およそ五百人に戒を授けた。当年五月、病を示し、遺偈の「生本不生、滅亦非滅、撒手便行、長空一月」を書き残し、八月六日に寂した。月潭は隠元などの唐僧からの薰陶を受け、詩文を能くした。語録に『龍巖集』『蕉窗詩集』『峨山稿』『永明壽禪師山居詩和韻』『巖居稿』『心華剩録』などがある⁽²⁾。

『黄檗祖徳頌』は宝永二年乙酉（二七〇五）十月の作で、当年に刊行されたと思われる。この年は隠元示寂の三十二年目にあたる。月潭はなお祖師を追慕し、『普照国師年譜』などによつて⁽³⁾、隠元の生涯を簡潔に十五首の七言詩で纏め、その徳業を再現しようとした。因みに、十五首の詩題は「普陀發心、夢僧分瓜、槩山脱白、金粟悟道、獅巖住靜、法通授衣、側石自平、祖庭闡法、應聘東渡、駐錫普門、太和開山、常行慈濟、松堂退隱、帝賜徽號、全身歸塔」である。

京都黄檗山萬福寺文華殿に現存する『黄檗祖徳頌』は、封面に「黄檗祖徳頌」と題し、「黄檗小像」、「老僧隠元自題」、「祖徳讚頌十五首并引」によつて構成される。

以下、この『黄檗祖徳頌』の本文について、句読点（ ）、（ ）（ ）を標示し、訓読を付け、また適当に註



黄檗祖德頌(4)

二、『黄檗祖德頌』標註

釈を加える。次に原本からの複写本の写真を付しておく。なお、文末に隠元禪師の生涯を紹介する。字体は、原則として原本の漢字をそのままに写す。写せない字体には、日本の常用漢字を用いる。

黄檗小像(黄檗の小像(5))

滿頭雪霜、空殺浪忙。(滿頭の雪霜なり、空殺し浪忙す。)

中華不住、逗到扶桑。(中華に住さず、扶桑に逗到す。)

設若撞着風顛種草、(たとえ風顛の種草に撞着すれば、)

難保醜態無處昂藏。(保つ難し、醜態の無処に昂藏すること。)

老僧隱元自題。(老僧隱元は自ら題す(6))。

祖德讚頌十五首并引

月潭道澄(7)

(祖德讚頌の十五首並びに引)

吾祖大光普照國師始自普陀發心、終至松堂示寂、六十年間、道業功成、定慧圓明。作華桑兩國之師、度人天無量之眾。巍巍德相、靄靄慈心。上皇賜號、樹君

建刹。種種勝績、讚莫能盡。澄也曾侍中匠、深沐法恩。滅後年尚、追慕曷止。茲揭道蹟十餘事之題名、各系以一章、章八句。雖綴詞陋拙、而聊伸嘆德之誠。倘後生輩采覽記誦、以獲諳開祖之芳猷、則幸矣。（吾が祖の大光普照国師は始めに普陀自ら発心し、終りに松堂の示寂に至り、六十年の間に、道業は功成し、定慧は円明す。華桑両国の師と作し、人天の無量の衆を度す。巍巍の徳相、靄靄の慈心なり。上皇は号を賜い、樹君は刹を建つ。種種の勝績は、讚しても尽くすことは能ず。澄はかつて中匠を侍し、深く法恩を沐す。滅後に年は尚しくなつても、追慕すればなんぞ止まらんや。ここに道蹟の十餘事の題名を掲げ、各々に一章を以つて系し、章に八句なり。綴詞の陋拙と雖も、而して聊かに嘆徳の誠を伸す。もし後生輩は采覧して記誦し、以つて開祖の芳猷を獲諳すれば、則ち幸いなるや。）

普陀發心（普陀の発心）

海上普陀始一登、

海上の普陀に始めて一たび登れば、

丹崖瓊嶂瑞光騰。

丹崖瓊嶂は瑞光を騰がる。

潮音洞裏瞻慈相⁽⁸⁾、

潮音洞の裏に慈相を瞻あげ、

飢飽嶺頭逢異僧⁽⁹⁾。

飢飽嶺頭に異僧に逢う。

殊勝境彰如琢玉、

殊勝の境はあらわし、琢玉の如きなり、

塵勞念盡似銷冰。

塵勞の念は尽くし、氷を銷けることに似る。

煮茶日供百千眾、

茶を煮て日に百千の衆を供え、

綠乳開花碗面凝。

綠乳は花を開けて碗面に凝らす。

夢僧分瓜（僧の分瓜を夢みる）

嚴父客楚不歸郷、

嚴父は楚に客として郷に帰らず、

盡孝安貧養老嬢。

孝を尽くし貧に安んじて老嬢を養う。

私慮塵韁猶未脱、

私かに慮り、塵韁をなお未だ脱げずことを、

故敲仙觀禱冥祥。

故に仙觀を敲いて冥祥を禱る。

三員梵侶夢相遇、

三員の梵侶を夢みて相遇し、

四瓣西瓜分使嘗⁽¹⁰⁾。

四瓣の西瓜を分けて嘗めさせる。

敢保出家縁正熟、

敢えて保ち、出家の縁は正に熟ることを、

醒來賽願屢焚香。

醒めて来て願を賽してしばしば香を焚く。

槩山脱白（槩山に脱白す）

十二峯前投鹽老、

十二峯の前に鹽老に投じ、

周羅剪落現僧儀。

周羅を剪落して僧儀を現す。

圓明戒體通身潔、

戒体を円明して通身は潔なり、

清淨願輪善力推。

清淨の願輪は善力の推すことなり。

方喜九潭龍產子、

方に九潭の龍は子を産むことを喜び、

咸傳萬福鳳生兒。

みな萬福の鳳は兒を生むことを伝う。

寄言郷族休嘲笑、

寄言し、郷族は嘲笑せずことを、

今日東林有遠師(1)。

今日東林に遠師有る。

金粟悟道(金粟に道を悟る)

遠登金粟見宗盟、
求道參玄志銳精。

遠く金粟に登つて宗盟を見え、
道を求め玄を参じて志は鋭精なり。

萬指叢中忘自己、

萬指の叢中に自己を忘れ、

一巴掌下悟平生。

一巴掌の下に平生を悟る。

火杖擎起賊身露、

火杖を擎起すれば賊身は露し、

筋斗打翻眾目驚(12)。

筋斗を打翻して衆目は驚く。

出窟駿貌多意氣、

出窟の駿貌は意氣多き、

機前誰觸爪牙寧。

機前に誰か爪牙の寧を触れんや。

獅巖住靜(獅岩に住靜す)

千尋壁立一獅巖、

千尋まで一獅岩は壁立し、

高構禪關遠俗凡。

高く禪関を構えて俗凡を遠ざける。

種竹栽梅幽趣足、

竹を種え梅を栽えて幽趣は足り、

喝天棒月古風巖(13)。

天を喝し月を棒して古風は巖とす。

半肩畦服從教破、

半肩の畦服は従つて破りせしむ、

一味瓊齋不厭鹹。

一味の瓊齋は鹹を厭わず。

衲子來詢西祖意、

衲子は来て西祖の意を詢ねれば、

答言野鳥語喃喃⁽¹⁴⁾。

答言す、野鳥の語は喃喃なることを。

法通授衣（法通より衣を授ける）

費翁室内付龜毛、

費翁の室内に龜毛を付し、

再返巖間獨養高⁽¹⁵⁾。

再び岩間に返つて独りに高を養う。

將謂深藏聞妙密、

將に謂い、深く藏して妙密を聞くことを、

何圖四海道聲軻。

何んぞ四海に道聲の軻けることを図らんや。

信衣傳到法通使、

信衣を伝えて到り、法通の使なり、

祖席要真濟水濤。

祖席は真の濟水の濤を要す。

皓叟負囊曾入夢、

皓叟は囊を負つて曾て夢に入り、

看斯瑞應嘆奇遭⁽¹⁶⁾。

この瑞応を看れば奇遭を嘆す。

側石自平（側石は自ら平らにす）

側石如舟當路橫、

側石は舟の如く当路に横たわり、

朝來忽見自端平⁽¹⁷⁾。

朝に来て忽ちに自ら端平なることを見る。

軒知一夜默然祝、

軒に一夜の默然の祝りを知り、

足驗前程法道行。

足りて前程に法道の行うことを驗す。

徑塢喝時成片裂、

徑塢に喝す時に片裂を成し、

虎丘講處點頭輕。

虎丘に講じる処に點頭は軽くなり。

世人莫訝甚奇異、

世人は甚だ奇異を訝く莫れ、

為顯高流心術誠。

為に高流の心術の誠を顯す。

祖庭闡法（祖庭に法を闡く）

檠岫鍾靈六六峯、

檠岫は鍾靈し、六六の峯なり、

雄哉運祖大禪叢。

雄なるや、運祖の大禪叢。

獅王一到補師席、

獅王は一たび到つて師席を補えば、

毳侶駢臻參道風。

毳侶は駢臻して道風を參じる。

堂構卻教從地起、

堂構は却つて地より起せしむ、

法燈長見互天紅。

法燈は長く見えて天に互つて紅くなり。

焜煌龍藏朝廷賜、

焜煌として龍藏は朝廷の賜いなり、

翻閱恭酬帝渥隆⁽¹⁸⁾。

翻閱して恭しく帝渥の隆を酬いる。

應聘東渡（聘に応じて東渡す）

逸公三請志虔誠、

逸公は三たびに請い、志は虔誠なり、

萬里樽桑泛巨瀛⁽¹⁹⁾。

萬里の樽桑に巨瀛を泛べる。

海若護師舟速到⁽²⁰⁾、

海若は師を護り、舟は速やかに到り、

陳僊垂識道當行⁽²¹⁾。

陳僊は識を垂れ、道は当に行う。

故邦皂白休留戀、

故邦の皂白は留戀する休れ、

異域靈山似喜迎。

異域の靈山は喜迎に似る。

寶林初登崎上寺、

寶林に初めて登れば、崎上の寺なり、

法雷震地眾聽驚。

法雷は地を震え、衆聽は驚く。

駐錫普門（普門に錫を駐す）

錫寓普門恰六秋、

錫を普門に寓して恰も六秋なり、

隨方怡樂唱徽猷⁽²²⁾。

隨方に怡樂して徽猷を唱える。

安居雖有園亭好、

安居して園亭の好し有ると雖も、

縱目卻無峰壑幽。

縱目すれば却つて峰壑の幽無し。

甘露滾滾霑普地、

甘露は滾滾たり、普地を霑い、

慈雲靄靄覆千洲。

慈雲は靄靄たり、千洲を覆う。

故山屢寄催歸信、

故山はしばしば催歸の信を寄り、

難奈主人苦扳留。

いかんぞ主人は苦しく扳留せんや。

太和開山（太和に開山す）

雒南勝地泰畝場⁽²³⁾、 雒南の勝地は泰畝の場となり、

鈞施繁隆剏寶坊。 鈞施は繁隆して寶坊を剏る。

唐國妙工粧聖像、 唐國の妙工は聖像を粧い、

暹羅靈木構高堂。 暹羅の靈木は高堂を構える。

門庭恢廓林巒暎、 門庭は恢廓し、林巒は暎り、

棒喝交馳龍象驥。 棒喝は交馳し、龍象はあがる。

一代開山功績就、 一代開山の功績は就り、

蘭孫桂子永聯芳。 蘭孫桂子は永く芳を聯ねる。

常行慈濟（常に慈濟を行う）

吾翁不亞永明師、 吾が翁は永明師につがず、

憫物克行菩薩慈。 物を憫れんで克く菩薩慈を行う。

贖命放生難筭計⁽²⁴⁾、 命を贖い生を放すことは筭計し難きなり、

度人施戒沒邊涯。 人を度し戒を施すことは辺涯沒し。

雜華嘗冤資恩有、 雜華は冤にかえてして恩有を資し、

般若兼持壯道基。 般若は兼ねて持つて道基をさかんにす。

或復當機提正令、 或いはまた機に當つて正令を提げ、

銅睛鐵眼莫能窺。

銅睛鐵眼は能く窺う莫れ。

松堂退隱（松堂に退隱す）

雙邦領眾踰從心、

雙邦に衆を領いて從心に踰え、

卸擔投閒隱翠林。

担を卸し、投閒して翠林に隠れる。

掩室猶嫌雲水謁、

掩室すればなお雲水の謁えを嫌い、

問安復有宰官臨。

問安すればまた宰官の臨み有る。

滿顛雪皎增康壯、

滿顛の雪は皎として康壯を増し、

千偈濤翻自嘯唵。

千偈の濤は翻れば自ら嘯唵す。

時上鶴亭行樂處、

時に鶴亭の行樂處に上り、

應真相貌見應欽。

應真の相貌は見えればまさに欽うべし。

帝賜徽號（帝は徽号を賜う）

禪窟宏開播洛畿、

禪窟を宏開して洛畿に播き、

名揚北闕上皇知。

名は北闕に揚げ、上皇は知る。

降香屢到五雲麓、

降香はしばしば五雲麓に到り、

賜號欽稱一國師⁽²⁵⁾。

賜號は一國師を欽稱す。

設利鎮山光燦爛、

設利は山を鎮め、光は燦爛なり、

宸奎藏匣墨淋漓。

宸奎は匣に蔵れ、墨は淋漓なり。

神龍呵護存悠久、

神龍は呵護し、悠久に存じ、

應壯梵園與帝基。

まさに梵園と帝基をさかんにすべし。

全身歸塔（全身は塔に歸す）

八旬有二道貌尊、

八旬有二になれば道貌は尊び、

期與諗翁同壽元。

諗翁と寿元を同じくすることを期す。

俄罷津梁辭濁世、

俄に津梁を罷えて濁世を辭し、

遺留祇夜耀山門。

祇夜を遺留して山門を耀す。

雙林變白曉風慘、

雙林は變白し、曉風はいたみ、

曇萼零紅晚日昏。

曇萼は紅をおとし、晚日は昏なり。

誰識其中離生滅、

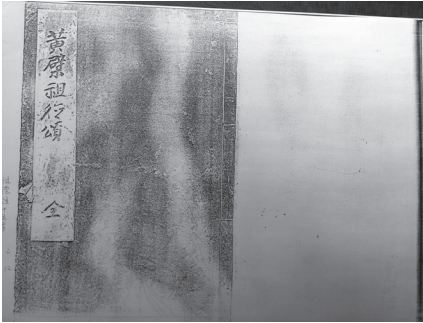
誰か其の中に生滅を離れることを識り、

全身闕塔蔭兒孫⁽²⁶⁾。

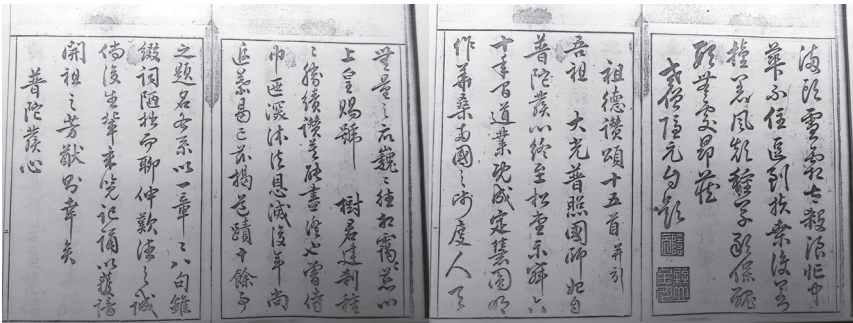
全身は塔に闕じて兒孫を蔭う。

皆寶永乙酉歲良月穀旦峨山不肖孫道澄焚盟拜書⁽²⁷⁾。（時に寶永乙酉歲良月の穀旦、峨山の不肖の孫の道澄は焚盟し、拜して書す。）

月潭道澄『黄檗祖德頌』標註



三、『黄檗祖德頌』の複写本



海三普陀如一空丹崖紫嶂
瑞光騰激音洞裏巖若如
鐵壁嵌嵌連雲傳殊勝境
如海公崖秀合若似消冰
茶口竹百千叢綠乳為花

破而體

夢僧不取

巖去空建不為御書空為
空去之嫌私慮差輕說未脫
敢放仙觀構冥祥三頁覽侶

喜如過四辦西依分使青
敢保空家信正熱醒來雲影
塵紫香

藥山脫白

十二時前投鐘空周羅古友

現僧儀圖於戒體通力索
借淨願禱若力推方善九澤
龍崖子咸信為指風生見言
空柳枝林啼笑今日東林
三這師

空乘悟道

志在空乘見玉皇本是奉
云玉鏡稿為指叢中忘自己
已巴掌下信平生少杖穿記
賦為靈筋斗打翻石目露出

空乘觀高壽寺塔寺推詞
水牙際

柳農信辭

千壽壁上一物出高捧祥
闌志飲九種竹或梅出樹呈

喝天指月石風蘿守有哇服
從破一珠氣齋不厭鹹袖
子未詢西祖之卷之孫白
謔喻

法通按衣

黃菊空內付毫毛再返莊言
稽者高借得佛堂首祿密
何獨心海是香期信衣信為
法通使視希要長信在清
皓心且兼空入身在斯瑞衣

喝為連

佛名空
佛名出舟高欲快其言
身空平野如尖默然悅
呈驗前程往道行徑瑞鳴時

心術誠

祖庭問信
象油鐘靈六之障障或運祖

六經聚柳三一為補師帝
羣侶併添意是亦手捧中於
從必場信惶長見巨天紅恨
惶龍藏即這賜齋潤茶酬
帝法信

應聘來處

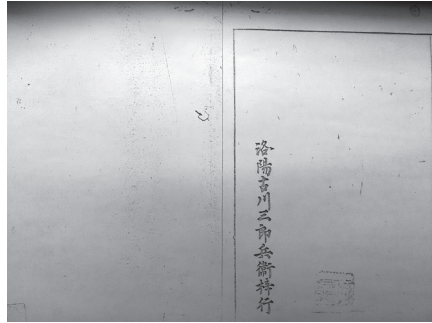
遠以三信志虔誠萬里搏景
從巨瀛海子護師舟遂到陳
樓岳樞老蒼川紅那皂白依
留香空城靈山似香近葉

月潭道澄『黄槩祖德頌』標註

<p>身聯芳 帝行慈濟 吾向不亞和明師 憫物克修 甚修慈贖命 救生難等竹 度人施戒後邊 徒難善善克</p>	<p>維南德地春輪揚釣於紫 陰靄葉坊索園抄工極聖傳 道羅堂不構亭門庭恢宏 林秀暎構 唱交地龍系孫 一代為山比後就宗孫桂子</p>	<p>大和開山 雖自和登峰 豈出寸靈儀 實吾地慈雲雷 震于物故 山為善催憐信 結未之人 共投留</p>	<p>杖節聖崎 上乃修富實地 衆莊常 駐錫善 錫寓柳林 恰入秋隨方怡示 唱微猷安 亦能可園亭好</p>
---	--	---	---

<p>龍何舊居修久 居壯黃園 五帝基 全身歸塔 八旬有二道於 岳期之 陰白曰 善元儀 祭障 梁辭 酒 世</p>	<p>帝賜微跡 極宮宏開 極落 裁久 揚北 闕 不皇 知降 音 爲 五 帝 基 崇 崇 孫 欽 補 國 師 授 利 濟 必 元 懷 深 宸 眷 藏 匣 是 餘 濟 神</p>	<p>開 德 翠 林 掩 雲 煙 雲 雲 岳 洞 出 沒 多 宰 官 臨 內 廟 雲 皎 陰 康 壯 千 倚 倚 翻 日 嘯 嗚 心 上 歸 亭 行 樂 亦 居 真 如 款 兄 應 欽</p>	<p>資 具 有 般 多 益 壯 世 基 成 後 宮 機 提 正 生 銅 財 法 眼 美 終 究 松 雲 進 德 雙 節 欽 志 踰 從 人 卸 塔 放</p>
--	---	--	--

<p>寶 永 乙 酉 年 己 月 初 日 城 山 山 有 孫 老 德 堂 堂 孫 善 書 原 本 所 藏 者 黃 槩 堂 文 庫 第 二 一 一 號</p>	<p>遠 宮 祇 衆 耀 山 一 應 林 雲 白 曉 風 條 葉 響 零 紅 晚 白 昏 以 識 中 誰 能 滅 令 勇 劍 焚 崔 兒 孫 皆</p>	<p>龍 何 舊 居 修 久 居 壯 黃 園 五 帝 基 全身 歸 塔 八 旬 有 二 道 於 岳 期 之 陰 白 曰 善 元 儀 祭 障 梁 辭 酒 世</p>	<p>帝 賜 微 跡 極 宮 宏 開 極 落 裁 久 揚 北 闕 不 皇 知 降 音 爲 五 帝 基 崇 崇 孫 欽 補 國 師 授 利 濟 必 元 懷 深 宸 眷 藏 匣 是 餘 濟 神</p>
--	--	---	--



『黄檗祖徳頌』複写本

四、隠元禪師の生涯

隠元隆琦は明末の臨済宗の禪僧で、日本黄檗宗の開祖である²⁸。日本皇室より大光普照国師、仏慈広鑑国師、径山首出国師、覚性円明国師と特諡され、また真空大師、華光大師と勅賜された。一五九二年（明朝万曆二十年、日本文禄元年）十一月四日に生まれ、一六七三年（日本寛文十三年、清代康熙十二年）四月三日に寂した。

隠元禪師は明の福建省福州府福清県万安郷靈得里東林村（福清上逕鎮東林村）に生まれる。俗名は林曾昂、号は子房である。六歳の時に父が行方不明となり、幼少より仏教に発心する。二十一歳、江南一円を回つて父を捜したが果たせなかった。二十三歳、浙江省普陀山に登つて潮音洞主のもとに参じ、在俗信者でありながら一年ほど茶頭として奉仕した。

二十九歳、明の萬曆四十八年（一六二〇）二月、故里福清の古刹で、唐の希運禪師も住した黄檗山萬福禪寺の鑑源興寿（？—一六二五）の下で出家した。天啓元年（一六二二）の春、北へ赴き、崇禎三年（一六三〇）三月の福清黄檗山萬福禪寺へ帰るまでの十年間、主に浙江省内を行脚し参学した。天啓四年（一六二四）五月、浙江省嘉興府海塩県金粟山広慧禪寺で密雲円悟（一五六一—一六四二）の会下に参じ、坐禪に専念した。激しい修業の末、二年後、天啓六年（一六二六年）冬のある日、大悟の瞬間を迎え、仏法の底に徹し、禪僧として見事に立った。

崇禎三年（一六三〇年）三月、金粟山広慧禪寺の住持である密雲円悟は、福清黄檗山萬福禪寺に晋山住持し、八月に広慧禪寺に戻った。この時、隠元は密雲に随行して福清黄檗山萬福禪寺に帰った。その後、萬福禪寺を出て福清の獅子巖で修行した。

一六三三年（崇禎六年）十月、密雲円悟の法子である費隠通容（二五九三―一六六二）は福清黄檗山萬福禪寺に晋山し、一六三六年の春まで住持した。この間、一六三四年（崇禎七年）の春、隠元は費隠の法を嗣ぎ、臨済宗の第三十二伝となった。

四十六歳、一六三七年（崇禎十年）十月、福清の信者たちの招請によって、隠元は福清黄檗山萬福禪寺の住持の座に就いた。隠元禪師の福清黄檗山住持は、一六四四年（崇禎十七年）三月までの初任と、一六四六年（南明隆武二年、清の順治三年）正月から、一六五四年（南明永曆八年）五月までの再任との二回に亘った。その足掛け十七年の経営によって、禪師は黄檗山を中国東南の一大禪林に築き上げ、黄檗山教団を結成し、臨済宗黄檗派を創った。

大陸における明末の臨済宗黄檗派は隠元禪師などの渡航によって、日本に伝えられ、黄檗宗と再生された。一六五三年（南明永曆七年、清の順治十年）十二月一日、長崎の唐人寺であった興福寺、崇福寺、福濟寺を中心とする信者たちの度々の懇請に応じて、隠元禪師は日本渡航を決めた。

六十三歳、一六五四年（南明永曆八年、清の順治十一年、日本承応三年）五月十日、隠元禪師は福清黄檗山を離れて厦門（アモイ）へ向かい、六月二十三日、厦門より長崎へ渡航し、七月五日の晩、長崎に着き、翌日迎えられて興福寺に進み住持した。同年十月十五日から、興福寺で冬期結制を行い、翌年の一六五五年（日本明暦元年）正月に解制した。この間、隠元の高徳と禪風を慕う具眼の僧や学者たちが日本各地から興福寺

に雲集し、僧俗数千とも謂われる活況を呈した。

一六五五年（日本明暦元年）五月二十三日、隠元はまた福州出身の檀越に請われて崇福寺の住持を兼任した。同年八月九日、妙心寺元住持の龍溪性潜（一六〇二—一六七〇）の懇請により、隠元は長崎興福寺を離れ、摂州慈雲山普門寺へ赴き、九月六日、普門寺に進み住持し、十一月四日、開堂説法を行った。一六六一年（日本寛文元年）八月までの六年余りに、隠元は普門寺に在住し、多くの信者と檀越を得た。

隠元禪師は、当初、渡日三年の約束があり、故国からの再三の帰国要請もあつて度々帰国を決意したが、龍溪性潜らが引き止め工作に奔走した。一六五八年（日本万治元年）十一月四日、隠元は江戸において幕府四代將軍徳川家綱（一六四一—一六八〇）との会見に成功した。一六五九年（日本万治二年）五月、隠元は幕府より新寺を開創させるため、山城国宇治郡大和田に寺地を賜った。

一六六一年（日本寛文元年）五月八日、七十歳の隠元は新寺を創り始め、望郷の念を込め、故郷福清の古刹と同名の黄檗山萬福禪寺と名付け、八月二十九日、京都黄檗山萬福禪寺に晋山した。これ以後、福清の黄檗山萬福禪寺は古黄檗とも呼ばれるようになった。

一六六三年（日本寛文三年）一月十五日、隠元は京都黄檗山萬福禪寺の法堂において祝国開堂を行った。この盛大な法会によつて、隠元の禅風は内外に承認され、日本禅宗の中に、元来の曹洞宗、臨済宗の二派に加えて新たに黄檗宗の一派が開立されることになった。当年十二月一日から八日までの間、民衆に対して京都黄檗山萬福禪寺で初めての三壇戒会が厳修された。

京都黄檗山萬福禪寺の開創によつて、隠元は日本禅宗の一派の開祖となつた。その人望を慕い、後水尾法皇を始めとする皇族、また幕府要人を始めとする各地の大名、多くの商人たちが競つて帰依した。

隠元は歴とした明代の臨済宗を嗣法し、臨済正宗を名乗り、独特の威儀を持った。その『黄檗清規』は、乱れていた当時の日本禅宗各派の宗統・清規の更正に大きな影響を与え、特に卍山道白（一六三六―一七一五）などによる曹洞宗の宗門改革では重要な手本とされた。もつとも、隠元の禅風や叢林としての清規は当時の明代の臨済宗に倣っていたので、既に宋元時代に伝来して日本に根付いていた臨済宗とは趣を異にした。その違いにより、自ら一派として「済家黄檗山萬福禅寺派」を形成した⁽²⁹⁾。この故、江戸時代、隠元を開祖とする京都黄檗山萬福禅寺の禅宗は、社会的に「臨済正宗黄檗山萬福禅寺」あるいは「臨済正伝黄檗派」と呼ばれ、一八七六年（日本明治九年）以後、公式的に黄檗宗と呼ばれる。

一六六四年（日本寛文四年）九月四日、隠元は京都黄檗山萬福禅寺の後席を法子の木庵性瑠（一六一一―一六八四）に移譲し、自ら山内の松隠堂に退き、楽しく黄檗山の発展を眺めていた。

八十二歳、一六七三年（日本寛文十三年）正月、隠元は体調の衰えを覚え、往生を予知し身边を整理し始めた。四月二日、後水尾法皇（二五九六―二六八〇）から「大光普照国師」号が特諡された。翌三日、遺偈を認めて示寂した。二十二年後の一六九四（日本元禄七年）九月、徳川幕府の許可によって国師号が公開され、以後、普照国師とも称される。

隠元禅師の弘法は、禅風思想、戒律清規、法式儀軌、教団組織、寺院制度などの面から、当時の日本仏教に多大な影響を与え、各宗派の復興運動に大きく貢献した。仏教以外にも、隠元とその弟子たちは、明清の文化や文物をも伝え、哲学、文学、語言、文字、また建築、雕塑、絵画、印刷、また音楽、医学、茶道、飲食、また書道、篆刻などの面から、江戸時代の社会生活全般に影響を与え、黄檗文化の現象を成した⁽³⁰⁾。今日に至り、その影響は優れた文化遺産として、また文化的伝統として種々の分野に遺されており、日本近

世の文化を語るとき、隠元禪師や黄檗文化を抜きにして論ずることは不可能となっている⁽³¹⁾。例えば、普段の日本人の生活で用いられる隠元豆や煎茶は、隠元禪師の伝来ともされる。

隠元禪師の功績を讃え、日本皇室は後水尾法皇からの大光普照国師の封号を始めとし、五十年ごとの隠元遠忌に、諡号を賜い、慣例となった。一七二二年、靈元上皇より仏慈広鑑国師、一七七二年、後櫻町上皇より径山首出国師、一八二二年、光格上皇より覚性円明国師、一九一七年、大正天皇より真空大師、一九七二年、昭和天皇より華光大師を特諡した。

隠元禪師の功績はその故国でも讃えられる。二〇一五年五月二十三日、中国国家主席習近平は北京人民大会堂で行われる中日友好交流大会に参加し、隠元禪師の事跡を提起し、「私は福建省で仕事をしていた当時、中国の名僧、隠元大師が日本に渡った話を知りました。日本で隠元大師は仏教の教義だけでなく、先進的文化と科学技術も伝え、日本の江戸時代の経済社会発展に重要な影響を与えました。二〇〇九年、私が日本を訪問した際、北九州などで両国人民の途切れることのない文化的根源と歴史的つながりを直接に感じました。」と言った⁽³²⁾。このように、現に隠元禪師は日中友好の懸け橋として重んじられている。

註

(1) 『黄檗祖徳頌』、一巻一冊。月潭道澄著。日本寶永二年乙酉（一七〇五）刊。卷末標記：「峇寶永乙酉歲良月穀旦峨山不肖孫道澄焚盥拜書。」又標記：「洛陽古川三郎兵衛粹行。」京都黄檗山萬福寺文華殿存。

(2) ① 『龍巖集』、四卷二冊。月潭道澄著。詩集、刊年は不詳。卷一の一首目の詩は「乙卯夏回峨山作」とする。乙卯、延寶三年（一六七五）、時に月潭は京都黄檗山萬福寺を離れて峨山直指菴に帰った。京都黄檗山萬福寺文

- 華殿存。②『蕉窗詩集』、六卷二冊。月潭道澄著。貞享乙丑二年（一六八五）高泉性激作序、江戸時代刊本。京都黄檗山萬福寺文華殿存。③『峨山稿』、二卷二冊。月潭道澄著。元禄十年（一六九七）自序、元禄十一年戊寅（一六九八）刊本。自序…「道本無言、籍言顯道。…元禄丁丑歲仲夏日月潭叟泚筆於直指心華室。」卷末刊記…「元禄十一年戊寅歲林鐘上浣日。書林古川三郎兵衛梓行、同林耶彌白氏共壽梓。」京都黄檗山萬福寺文華殿存。
- ④『永明壽禪師山居詩和韻』、一卷一冊。月潭道澄著。元禄十二年己卯（一六九九）自序、元禄十三年庚辰（一七〇〇）刊本。卷末刊記…「元禄庚辰四月上旬。洛陽書肆古川三郎兵衛刊行。京都黄檗山萬福寺文華殿存。
- ⑤『巖居稿』、六卷三冊。月潭道澄著。元禄十六年癸未（一七〇三）自序。序言…「此集乃余嚮居龍巖山房時所著之餘稿也。或舒嘯雲山泉石、或贈會縑素道友、一時率真適意之語耳。…元禄癸未歲菊月上浣心華室老衲澄自敘。」京都黄檗山萬福寺文華殿存。⑥『心華剩錄』、五卷五冊。月潭道澄著。寶永七年庚寅（一七一〇）自序。享保六年辛丑（一七二二）刊本。卷末刊記…「享保六年龍集辛丑孟正吉日謹識。皇都書林寺町通松原上町古川三郎兵衛雕行。」京都黄檗山萬福寺文華殿存。
- (3) 『普照國師年譜』、二卷、南源性派・高泉性激撰。日本元禄七年（一六九四）、国師号が公開された年以後に完成。『新纂校訂隠元全集』附録所收、五〇八七―五二六四頁。『新纂校訂隠元全集』、全十二冊、共五四八六頁。平久保章編。東京開明書院、一九七九年十月。明清時期、江戸時代諸刻本の編輯影印。
- (4) 表紙の題目。
- (5) 見返しの頁に隠元禪師の法像。
- (6) ここに、陰文の方印「隠元」、「槃山主人」がある。
- (7) 月潭道澄、原本に無い。今、加える。
- (8) 『普照國師年譜』…「萬曆四十二年甲寅。師二十三歲、是春附進香舟至南海普陀山朝禮觀音。意謂菩薩神力、必能陰助尋父之願。及到山、忽見佛境殊勝、大非人世、一時凡念冰釋。遂發心投潮音洞主爲道人、領茶頭執事、日供萬衆、不以爲勞。洞主嘆曰…此佛子真菩薩之使也。其信心不懈忘如此。按師晚錄云…予昔因朝禮普陀大士、遂

發心出家、今五十餘年矣。近聞遭紅夷之厄、不能無感於衷焉。」『新纂校訂隱元全集』五一〇三頁。『新纂校訂隱元全集』、全十二冊、共五四八六頁。平久保章編。東京開明書院、一九七九年十月。明清時期、江戸時代諸刻本の編輯影印。

- (9) 『普照國師年譜』…「萬曆四十三年乙卯。師二十四歲。寓普陀、竊念此處乃菩薩蔭人福報之所、苟非精修實學者、曷足爲吾師。乃往茶山尋祇園老宿。過飢飽嶺、忽值老僧龐眉鶴髮、懷中取糶與師。師嘗一飽、擡頭禮謝。老僧隱矣。疑爲神僧。是春三月、附香船歸聞省母。母喜從天降。即勸母事佛持齋、日常念佛爲課。」『新纂校訂隱元全集』五一〇五頁。

- (10) 『普照國師年譜』…「萬曆四十六年戊午。師二十七歲、常慮出家緣弗就、一日登石竹山九仙觀祈夢。夢游深山岩崖中、有三僧坐磐石上、方食西瓜、剖而爲四。見師來、忻然以一分與之。師食畢遂寤。竊自喜曰…四沙門果、吾預其一。吾事濟矣。」『新纂校訂隱元全集』五一〇八頁。

- (11) 『普照國師年譜』…「光宗皇帝泰昌元年庚申。師二十九歲。按皇明通紀、是年七月、神宗登遐。八月初一、光宗即位。故以萬曆四十八年爲泰昌元年。是春二月十九日、師詣黃檗、禮賜紫鑑源壽公剃度。或者嘲曰…東林亦有佛耶。師應之曰…嘗聞佛性遍週沙界、豈獨外東林。昔廬山東林有慧遠、焉知今日東林無遠公乎。聞者嘆賞。師遂默願云…此處落髮、若不精修梵行、興崇法門、生陷泥犁。自是常持疏走民間募貲。冬聞道享法師講楞嚴經於海口瑞峯寺、特往聽之。初不解其義、至第四卷、畧有領會云。」『新纂校訂隱元全集』五一〇一頁。

- (12) 『普照國師年譜』…「天啓六年丙寅。師三十五歲。是年、金粟衆滿五百。分爲兩堂。…同參續知公、知師所証、謂五峰曰…老隱徹也。峰乃對衆勘云…汝有悟處、試道看。師云…道即不難、只恐驚群動衆。峰云…但說何妨。師打筋斗而出。峰云…真獅子兒善能吼哮。尋出堂作火頭。一日、密和尚室中、與衆論敬鬼神而遠之、衆答曰。師在門外立。密云…汝進來說看。師進前、豎火叉云…離不得這老賊、近不得這老賊。密便打云…汝作賊會那。師即拂火叉出云…賊賊。師与密和尚機語契合多如此。」『新纂校訂隱元全集』五一二一頁。

- (13) 『普照國師年譜』…「崇禎四年辛未。師四十歲。按行實云…是年、龔夔友、夏象晋二居士請住獅子岩。剃度性常、

性樂性善等、刀耕火種、併力合作、攻苦食淡。人所難堪、師怡然自得。嘗述偈云：「結個茅庵石竹西、喝天棒月走雲霓。猶憐路半未歸客、拂拂春風浪馬蹄。又按與中上座書云：獅岩係吾手闢。汝能守之、前後有光。吾念足矣。」

『新纂校訂隱元全集』五一三四頁。

- (14) 『普照國師年譜』：「崇禎五年壬申。師四十一歲。居獅岩絕頂、万仞壁立。作岩中自叙偈、有眉堆三尺雪、身護万年藤句。時有僧問：如何是山中語。師云：野鳥傳古韻。僧云：如何是山中人。師卓然而立。僧云：恁麼則壁立千仞去也。師便打。」『新纂校訂隱元全集』五一三四頁。

- (15) 『普照國師年譜』：「崇禎七年甲戌。師四十三歲。在黃檗西堂寮。一日、因衆頌百丈再參馬祖一喝三日耳聾黃檗聞拳不覺吐舌因緣。師目之俱未妥。乃頌云：一聲茶毒聞皆喪、徧界嚮懷沒處藏。三寸舌伸安國劍、千秋凜凜白如霜。呈上費和尚。即圈出貼法堂前示衆。遂鳴鼓陞座云：我有一枝拂子。是從上用不尽的。顧師云：汝作麼生奉持。師喝云：放下著。費云：再道看。師又一喝便出。費下座。師進方丈禮拜云：適纔觸忤和尚。費舉拂云：汝且將去行持。師接得便打一拂。費云：將謂報恩那。師又打一拂、便歸寮。二月、仍回獅岩住靜。」『新纂校訂隱元全集』五一三八頁。

- (16) 『普照國師年譜』：「崇禎九年丙子。師四十五歲。住山頗久、四方仰重。一夜、夢一老人長眉皓首、荷甌負囊而入。師云：老老大大負累若此、不亦勞乎。老人放下行囊、出書幅單条并所負之物、見贈而去。醒以所夢告侍者玄生。生云：斯乃吉夢、必有徵應。未幾果法通費和尚專使齋源流法衣至。師之道化往往徵兆如此。作曹谿源流頌三十五則。挽印初者旧卓龍吟居士偈。」『新纂校訂隱元全集』五一四二頁。

- (17) 『普照國師年譜』：「崇禎十年丁丑。師四十六歲。是夏五月、黃檗耆宿同侍御心弘林公等、請師接席當山。師却之、而請益堅、遂應。先是、岩側有塊石如舟。遊客每以不平為嘆。師云：時節若至、自然平矣。一夕、跏趺石上、持呪默祝龍天：此去黃檗、法道果行、此石可平。端坐炷香歸室。次早侍僧報云：奇哉。石已平矣。師云：不必說。吾祝已徵。因名曰自平石。作銘記之。」『新纂校訂隱元全集』五一四四頁。

- (18) 『普照國師年譜』：「崇禎十一年戊寅。師四十七歲。春、建千日期場、開闔龍藏、答神廟賜藏恩也。按寺志云：

三世祖中天圓公於萬曆辛丑赴闕請藏、居燕八年、未蒙諭旨、以疾卒京中。其徒孫興壽興慈復力懇、閱六載、會相國葉文忠公為奏聞。甲寅歲始頒藏至。師平時每語先人請藏艱辛之故、未嘗不惻然哽咽。至是翻藏、仰酬世德。」

『新纂校訂隱元全集』五一四六頁。

(19) 『普照國師年譜』・「順治十年癸巳。師六十二歲。∴。未幾、日本興福寺住持逸然奉王命差僧古石、齋書帛聘師東渡開化。先是數請未決、茲見其誠懇、特為上堂許之。」『新纂校訂隱元全集』五一八九頁。

(20) 『普照國師年譜』・「順治十一年甲午。師六十三歲。(中略)數日風浪大作、師書免參二字貼船頭、其浪遂平。時有巨鱗數萬隨舟而行。七月初五晚、抵長崎。是夜海上漁人咸見崎中紅光互天、意謂人家失火、各操舟救援。及至、其光隱矣。始知師入國之瑞應也。次早寺主逸然同檀越請進興福寺、法語五則。即日二鎮主謁見、謙恭致禮、各贈以偈。」『新纂校訂隱元全集』五二〇〇頁。

(21) 陳僊、陳仙、陳博と名乗る仙人。一六五四年、隱元禪師の渡航に当たつて、陳博と名乗る仙人は扶乩を通じて、送別の詩「寄贈和尚扶桑之行」・嚼盡黃根齒不寒、可知機下有禪關。三千桃葉初生日、以待真人共對澆。」を贈つた。寶永二年(一七〇五)、靈元上皇は、この詩を大いに重視し、黄檗宗の僧並びに参議藤原韶光、左大臣近衛家熙、天臺僧止堯憲などに文を書かせ、文集の『桃葉編』を編集させ、自ら序を寄せた。この『桃葉編』にある「寄贈和尚扶桑之行」の詩は、隱元禪師の弘法の見通し及び靈元上皇の誕生、即位についての予言で、またこの詩の作者である扶乩の仙人陳博が、実際に仙人と尊ばれる北宋の道士陳搏(八七一—九九九)の化身であると解釈された。靈元上皇はこの詩を通じて、皇室の神聖と尊厳を高めようと勘案したのでろう。参考…①『桃葉編』、三卷。藤原韶光編、日本寶永二年(一七〇五)。靈元上皇序。巻頭に「寶永二年十月二十三日」と記す「太上天皇御製桃葉編序」、巻末に「寶永二年歲次丙戌十一月朔旦、傳天臺教觀前大僧正沙門堯憲謹序」と記す「後序」がある。各巻題記…「参議正三位臣藤原朝臣韶光奉教撰、直指臣僧道澄、佛國臣僧道龜同校訂。」無名氏筆写本、日本愛知縣常滑市黄檗宗龍雲寺黄檗堂文庫存。②林觀潮「隱元隆琦と日本皇室―『桃葉編』を巡つて―」、『黄檗文華』第一二三號、京都黄檗山萬福寺黄檗文化研究所、二〇〇四年七月。

(22) 『普照國師年譜』…「明曆元年乙未。師六十四歲。(中略)會竺印上座齋賜紫龍溪大德等書請師住攝州普門。師曰…老僧年邁遠涉洪濤、以踐長崎之信足矣。那堪又應乎。既而二鎮主及竺印懇請不已、乃許之。(中略)師到普門、四方道俗、疑信參半、是非蜂起。師曰…鼻祖西來、有服毒之事。蘭溪東渡、有流言之謗。古人尚爾、而況於今、無足怪矣。」『新纂校訂隱元全集』五二二頁。

(23) 泰猷、太和尚。『普照國師年譜』…「寬文元年辛丑。師七十歲。…五月初八日、太和開創、仍以黃檗山萬福禪寺名之、志不忘舊也。故有東西兩黃檗之語。八月廿九日進山、法語三則。」『新纂校訂隱元全集』五二三頁。

(24) 『普照國師年譜』…「寬文四年甲辰。師七十三歲。…師自開山黃檗、多放禽鳥、但闕放生池以縱水族。是夏洛中有二信士舍金、即命工山門內鑿池。池成放生。」『新纂校訂隱元全集』五二四頁。又、「放生池偈」…「余開山黃檗、得林巒之秀氣、每放生靈、盡皆禽屬、惟水族無與焉為歎。適某信士輸金鑿池、甚愜所懷。今後得魚鳥之同樂、樂莫大焉。乃述偈以識。鑿地開山澈本源、長流德澤利無邊。池成碧湛從魚躍、林密扶疏放鳥喧。人得逍遙無掛礙、物能解脫即悠然。盡教鱗羽游江漢、其樂春秋一大年。」『新纂校訂隱元全集』三六四頁。

(25) 後水尾法皇宸翰…「敕。朕聞臨濟之道徧行天下、至天童雙徑光輝益盛。唯我日域久乏宗匠、幸黃檗隱元琦和尚受請東來、重立綱宗、闡揚濟道、大光於國、功不可磨。朕屢沾法乳、簡在朕心。故特賜大光普照國師之號、以旌厥德。欽哉。故諭。寬文十三年四月二日。」京都黃檗山萬福寺存、『新纂校訂隱元全集』五四六一頁載。

(26) 『普照國師年譜』…「寬文十三年癸丑。師八十二歲。…泊然長逝。實寬文癸丑四月初三日未時也。留身三日、容色如生。四部眾持香花而供者、靡不悲哀而戀慕焉。三日後鎖龕、百日內諸弟子伴龕坐禪、二時諷誦上供、以酬慈蔭。遵治命停龕三年、乃於延寶乙卯夏四月三日、當大祥之期、備法仗奉龕入塔、塔坐癸向丁、在開山堂之左。嗣法門人無得寧等二十三人、剃度弟子河陽常等五十餘人。」『新纂校訂隱元全集』五二六〇頁。

(27) 寶永乙酉、寶永二年(一七〇五)。

(28) ①『新纂校訂隱元全集』、全十二冊、五四八六頁。平久保章編。東京開明書院、一九七九年十月。明清時期、江戶時代諸刻本の編輯影印。②林觀潮『隱元隆琦禪師』、廈門大學出版社、二〇一〇年十月。③林觀潮『臨濟宗

黄檗派與日本黄檗宗』、中國財富出版社、二〇一三年三月。

(29) 大鵬正鯤『濟家黄檗山萬福禪寺派下寺院牒』、一卷。日本延享二年(二七四五)寫本、京都黄檗山萬福禪寺文華殿存。

(30) 『黄檗文化人名辞典』、「序」：「今日、その影響は優れた文化遺産として、また文化的伝統として種々の分野に遺されており、わが国近世の文化を語るとき、黄檗禪や黄檗文化を抜きにして論ずることは不可能となっている。」
『黄檗文化人名辞典』、大槻幹郎、加藤正俊、林雪光編著、京都思文閣、一九八八年十二月。

(31) ①柳田聖山：「近世日本の動きは、どの一面を取ってみても、黄檗文化の影響なしには解釈できない。」「近世日本仏教の改革―隠元」、『禪と日本文化』一八六頁、東京講談社、一九九二年六月。②柳田聖山：「明治以後の急激な西欧化によって、與かく見逃されていた靈性アジア的、本質的な反省の時與して、隠元生誕四百年を位置づけてよいのでないか。」『隠元誕生四百年 靈性アジアの本質的な反省の時』、『禪畫報』第二十號、四五頁、京都千真工藝株式會社、一九九二年夏。

(32) 習近平「在中日友好交流大會上的講話」、人民日報客戶端、二〇一五—〇五—二三 二二…二〇…二五。

上村観光来簡集『交遊帖』解題と翻刻

堀川貴司

ここに紹介するのは、稿者架蔵の書簡集で、すべて上村観光宛てのもの全二〇通が卷子本一軸に仕立てられていた。緑色卍繫地に牡丹を摺り出した蠟染の表紙（二二・〇×二七・九糎）、紫檀の軸頭、桐の共箱の蓋表に打付墨書で「交遊帖」と記されている筆跡は観光自筆と思われ、「交遊」という命名から見ても、観光自身によつてこの形にまとめられたものであろう。

差出人は、順に近重真澄、松本文三郎、荻野仲三郎、林泰輔、瀧精一、（不明）、鳥居素川、結城素明、藤井乙男、和田万吉、幸田成友、辻善之助、黒板勝美、島文次郎という、大正期の仏教学・美術史学・漢文学・国文学・国史学等々を代表する学者たちである。

近重・松本・荻野・藤井・辻・黒板らは観光が主筆を務めた月刊雑誌『禅宗』にししばしば寄稿している。書簡の内容は多く観光に禅宗史上の不明点につき教示を仰いだり、京都の禅寺への紹介を頼んだり、といったもので、学者たちにとつて寺院資料へのアクセスの仲介役を観光が果たしていたことがわかる。観光もそのようなつながりを持つことで、『禅宗』への寄稿者を増やしていったのであろう。

彼が京都禅宗界と東西アカデミズムを結ぶキーパーソンになっていたことは、『禅宗』一八卷二号（一九〇号、明治四四年一月）の「忘機日乗」、同二号（一九二号、同二月）の「壺中日乗」という病間日録にも活写

されている。四三年一二月一〇日から翌年一月一日までのもので、その間の来訪者は、学問関係者に限っても富岡謙蔵、新村出、吉沢義則、小川琢治、湯浅半月、藤井乙男、島文次郎、桑名鉄城、大江文城、佐賀東周、内田銀蔵ら、来簡では古城貞吉、境野黄洋、藤井乙男、近重真澄、和田万吉、出簡では辻善之助、黒板勝美、森大狂などの名前が見える。

和田や幸田は、古くからの愛書家仲間である。徳富蘇峰記念館所蔵の蘇峰宛上村觀光書簡は、多く觀光が入手したり仲介を頼まれた古典籍を蘇峰に取り次ぐような内容であるが、某年五月一日付（明治末あるいは大正前半か）の葉書は、湯浅半月（蘇峰の姉が半月の兄に嫁いている）が記したもののらしく、「五山文学の上村と一酌を催して大兄を懐想致候」との文面と、「桃華生」（富岡謙蔵）、「出子」（和田万吉）、「閑堂」（觀光）の署名が並ぶ。半月はわざわざ「註 桃華君は御存じの富岡氏、出字君は和田図書館長、閑堂君は五山文学の著者」（読点を補った）と記しているが、蘇峰には言わずもがなであつたろう。幸田については書簡7を参照されたい。

以下、各書簡冒頭に差出人の略伝と内容に関する略注を掲げた上で翻刻する。文字は通行字体に直し、句読点を補っている。誤字脱字、ミセケチ等は適宜注記した。

1 近重真澄（「大正九年」九月二三日付 一八・一×一二〇・〇糶、素紙三枚継墨書

一八七〇〜一九四一。号、物安（庵）。化学者、京都帝国大学教授。禅・茶道・漢詩にも詳しく、その方面の著作もある。文中の詩は『禅宗』二七卷一一号（三〇八号、大正九年一月）の文苑欄に「閑堂道人新

「居偶成」の題で載る。ただし「芝」を「斐」に、「尽未伝句」を「語皆仙趣」に、「幽谷白雲」を「的是寒山」に作る。おそらく「斐」は誤植、他の二箇所は本人かまたは觀光による推敲で、文面にある「大正の寒山子」を活かしたものであろう。翻刻では読み下しを補った。「涙痕録」は、觀光が母の逝去について記した和文で、『禪宗』二七卷九号（三〇六号、大正九年九月）所載。短歌が一〇首含まれ、そのなかに「きのうけう執るものうし筆つかをつきせぬなみたいかてはらはむ」とある。

肅啓 秋涼適意、高堂愈御清祥奉恐賀候。先日は御近辺迄罷出候序ニ、御邪魔申候て、尚ほ何処へか御案内申上けんと存候処、却而清羞を供せられ、芳情鳴謝之至ニ存候。後に心付き候得共、御外出之御予定あらせられ、時間の御都合を妨害いたし候事と恐縮仕候事ニ御さ候。御新宅誠に結構、一詩相試候まゝ奉呈、叱教を乞候。

訪閑堂道人於其新居偶成

纒叩柴門習氣除（纒かに柴門を叩けば 習氣 除かる）

紫芝香草感如々（紫芝 香草 感 如々たり）

壁間題尽未伝句（壁間 題し尽くす 未伝の句）

幽谷白雲仙子居（幽谷 白雲 仙子の居）

政

大正の寒山子と見立たる積ニ御さ候。

涙痕録、不覚落涙御事候。貴兄の多能なる、和哥^哥まで勘能^能とは驚嘆仕候。固より印刷之誤植とは存候得とも、

今日はけふに、けうにあらす。一寸申上候。

右先日の御礼をかね、諸用とりませ寸楮如此ニ御さ候。尚小生土日月之三日の夜分は大抵在宿、且つ閑暇を得られ候。御来光奉待候。早々不乙

真澄拝 九月廿三日

閑堂先生侍史

返々、御令政様へもよろしく御致声是祈候。以上

2 近重真澄 某年八月五日付 一八・〇×九八・八糶、素紙二枚継墨書

文中「悪智悪覚」(悪知悪覚)は、身につけてしまった悪い智恵。『無門関』冒頭に見える。「俠骨論」は近重著『物庵禅話』(文泉堂、一九二二)の第五章が「俠骨論」と題されているので、それを指すとすると、本書簡はそれ以前の成立か。

拝啓 御約束のもの、大ニ延引、昨夜半ニ漸ク脱稿、被持上候。御落手、御出版と否トハ貴意ニ任せ候。実際物ニなり居らず。将又別冊ハ、頃者英国なる未知の友より贈与せられ、一読致候処、高等数学ニ基ク智恵の弊害を列挙し、吾人者コンモン、センス以上の小智ニ迷さるゝことなかれと論居候。宗乗の上より見れば、更ニ一步を進めて、ソノコンモンセンスも亦た打破、一生を要すへきものなれとも、ソコ迄ハ外人ニは六ヶ敷事ナラン。Fake Education ハ、訳して悪智悪覚論とすへく、一訳の価値可有と存し、俠骨論の代ニ著手致しかケ候得とも、病余慵懶の情ニ不堪、相ヤメ候。貴覽ニ入候間、御試ミナサレ候テハ如何也。右ハ当月

中位ハ御借し申上候テモよろしく御坐候。先ハ不取敢右当用のミ如此御さ候。再拝

八月五日 物庵生

上村先生足下

3 松本文三郎

某年一月二日付 一八・〇×四六・七糶、素紙二枚継墨書

一八六九〜一九四四。仏教・美術学者。インド仏教およびインド美術が専門。京都帝国大学教授、東方文化研究所長などを歴任。文中「波雪村」は、室町後期の画家雪村周継のことで、蕨のような波頭の書き方を創始したことからそう呼ばれる。

拜啓 昨日は御出先之所を御邪魔致奉多謝候。扱甚々唐突之義に候得共、其節拜見仕候波雪村のメクリ一葉、何とかして御割愛御譲被下間敷哉。此段懇願之至ニ不堪候。勿論急ぐ必要無御坐候間、貴兄媛々御賞翫之後にても宜敷候。右御願まで。頓首

十一月十二日 松本文三郎

上村観光様

4 荻野仲三郎

大正八年一〇月二三日付 一八・五×七八・五糶、素紙二枚継墨書

一八七〇〜一九四七。歴史学者。日本史が専門で、古美術保存事業にも関わる。東京女子高等師範教授・陽明文庫主管を務める。文中『本朝高僧伝』は卍元師蛮編、宝永四年（二七〇七）刊の僧侶伝記集成。編

者は臨濟宗僧であるが、対象は各派に及ぶ。南化玄興（妙心寺住持、一五三九〜一六〇四）および愚堂東寔（妙心寺住持、一五七七〜一六六一）の伝はともに巻四四に収められ、文面どおりの国師号が贈られたことが末尾にそれぞれ記されている。

拜啓 時下秋冷之節、弥御安祥奉賀候。当夏郡山之一夜已来音問を欠き、疎情に候が、御近況如何に候哉、奉伺候。何時ぞや御伺申上候国師号一件にて、南化・愚堂に国師号宣下なき由承り候処、本朝高僧伝には南化に定慧円明国師、愚堂に大円宝鑑国師之勅諡有之候由記載有之候。小生之何ひ違かとも存候へ共、再応御意見伺度候。折返し御高見御漏願上候。敬具

大正八年十月十三日 荻野仲三郎

上村老兄侍史

5 林泰輔 某年九月二日付 一七・二×七三・一糶、素紙二枚継墨書

一八五四〜一九二二。歴史学者。東京高等師範学校教授。朝鮮史および中国古代史が専門、甲骨文字や『論語』および孔子の研究で知られる。旧蔵書は筑波大学林文庫に収め、原稿類の一部が慶應義塾大学附属研究所斯道文庫に寄託されている。文中「木製活版本論語抄」とは、現在筑波大学附属図書館蔵の『論語抄』二〇巻（巻一九・二〇欠、ロ六六〇―二）のことであろう。「芳郷」は芳郷光隣。東福寺の僧。同書に論語についての彼の講説が引用されていること、「外記常忠云」という文言も見えることは、阿部隆一「室町以前邦人撰述論語語孟子注釈書（上）」（『斯道文庫論集』二、一九六三・三）にも指摘がある。同論文では

同書を、清原家において禅僧の説を取り入れて室町末・近世初に成立したものと推測する。

拜啓 未得拜芝候得共、愈御多祥之段、敬賀此事ニ御座候。陳ハ、甚突然之儀ニ候へ共、兼々尊台にハ、五山文学等に就てハ精細なる御研究被遊候由、承り及候ニ付、御多忙中誠ニ恐縮ニ御坐候へ共、左之件御示教を仰き度、御願申上候。

別紙之文ハ、木製活版本論語抄ニ有之候ものなるか、文中西京東洛ト有之候ハ、京の西、京の東と申事ニ候哉。或ハ僧侶の間ナドにて南都北嶺ナド申様に、其派を分ち候事も有之候ものなるか。又芳郷と申僧ハ、東福寺第二百世ニ、芳郷名光隣、天文五年滅、と申者と、鎌倉円覚寺第四百十一世に、芳郷諱妙統、文明七年寂、と申者と有之候由ニ候か、何れの方と見るか適當なるへきか。万里ハ漆桶万里なるへくと存候へ共、翰林学士大外記と申ハ、清原業忠（常忠）なりや否や。翰林学士と申事、聊不審の廉も有之、誠ニ決定致し兼候ニ付、もし御高教を辱うし、渙然氷積することを得は、大幸不過之候。先ハ右御願上如斯御座候。敬具

九月二日

林泰輔

上村観光様

尚右論語抄ハ、出版年月及著者之名ハ無之候が、製本活字等より見れば、寛永以前之ものと被察候。而して著者ハたぶん清原家にて、足利時代のものなるべくと存候。

6 瀧精一〔大正七年〕六月二十九日付 一七・五×九七・二糶、素紙ニ枚継墨書

一八七三〜一九四五。美術史学者。東京帝国大学教授。専門は日本美術史。美術研究雑誌『国華』の編集

に長く携わる。文中「玉稿」とは、觀光の「青萍博士の三教思想研究を読む」であろう（青萍は末松謙澄の号）。上中下の三回に分け、『国華』三三八・三四〇・三四一（大正七年七月・九月・一〇月）に、『禅宗』二五巻八・一〇・一一号（二八一・二八三・二八四、大正七年八月・一〇月・十一月）に掲載されている。

尊翰拜誦仕候。先頃より御出京相俟、例之御旅宿へも問合せなど致居候も、御出無之、如何と存居候。折柄之御書面二候玉稿ハ目下校正中ニ有之候。印刷之上ハ如貴命早速ゲラ一通御送可申上候。然るニ国華ハ大抵廿日後之発行を例とする様之次第に有之候に付、禅宗の方へは八月より御載録之御都合に御願申上度希望之至ニ御坐候。尚小生ハ多分両三日中ニ京阪へ出張可仕ニ付、此度は是非拝顔を得度存申候。右御返事旁々匆々如此候。頓首

六月二十九日

精一

上村老台坐下

7 幸田成友（大正一二年）一〇月一三日付 一九・〇×（五二・五五二・九）糶 八〇〇字詰原稿用紙（二

〇字詰四〇行、「日比谷用紙」とある）二枚、ペン書

一八七三〜一九五四。歴史学者。慶應義塾大学教授・東京商科大学教授。日本経済史・日欧交渉史を専門とし、蔵書家としても知られ、両大学に「幸田文庫」がある。露伴は兄。妹の延・（安藤）幸は共に音楽家。成友は、明治三四年大坂市史編纂主任となり、四二年まで勤務、その後京都帝国大学講師を一年務め、四三年に慶應義塾大学教員となった。この間、訪書のため休日は京都・奈良に出かけ、京都では富岡謙蔵

（鉄斎の子）と知り合い、その紹介で上村観光とも知遇を得、三人でよく酒を飲んだという（幸田成友著作集七所収「富岡家三代」）。震災時は、慶應義塾大学教員および東京商科大学予科教授兼同大学助教。今宮新「恩師幸田先生の思い出」（著作集別巻附録の月報8所収）には、赤坂丹後町（現在の赤坂四丁目的一部）に居住、一三年に荻窪（第一巻附録月報5所収、柿原謙一「幸田成友先生御夫妻と一学生」に上荻窪一ノ三とある）へ転居したとある。文中「田中萃一郎」（二八七三〜一九二三・八・一三）は東洋史学者、慶應義塾大学教員。蔵書は田中文庫として慶應義塾図書館にある。また「村口、浅倉、横尾、いそべや」は村口書房（神田今川小路）、浅倉屋（浅草）、横尾文行堂（上野広小路）、磯部屋（麹町）という、神保町・本郷の二大古書街以外にある有力古書店を挙げたもの。「小川町」は神保町のことであろう。「鹿田君」は大阪を代表する古書店鹿田松雲堂の主人三代鹿田静七。

拝啓 御見舞二預り難有存候。實際今度の地震及び火事には驚かさされ申候。○地震の際は小生丁度小川町を電車二乗じ通行致居りし際にて、その節はさして恐怖も感ぜざりしが、小川町より一直線二電車道路を我家に立帰り、その後は殆ど何日二何をせしやを忘れ候位、夢中に十日余を暮し候。幸に小生及び家族一同無事、当時次女は学校へまゐり居り、妻は姉方へまゐり居り、小兒一人宅二居り候始末、能く無事に往来へ出でしものと存候。小生の親戚、横浜・平塚・小田原等劇震地に居りしも、幸二一同生命二別条なし、但し家ハ崩潰したるあり。又妻の方の親戚も無事、たゞし焼出されあり崩潰あり。拙宅去月二日より一昨日まで多き時八十一人、少き時も七人の罹災者寐とまり致居り（妻の親戚）、トテモ机に向つてゆるく、勉強など出来ず、寢道具・衣服・食器等眼前に横り、掃除も出来ず、塵埃と怒声・罵声・泣声（近処二沢山あり）の中に暮し

候。昨日より坐敷を掃除いたし、ホット一息つき候。○小生宅は元來借家なれば、雨が降らうが風が吹うが一向かまハねど、雨もりには閉口、タラヒ・バケツ其他あらひざらひの容器を坐敷中にとり散かし、首をスボメてゐる処など、滑稽とやいはん、悲酸とやいはん。況や電灯（「氣」ミセケチ）なく水道なき震災後の数日間ハ、淋しい感致候。○人間は非常ニ野蠻になり、喧嘩をするか、哀憐を請ふか、盜賊をするか、甚だ極端に陥り候。市街の復興もさる事ながら、人心の復興も一大事と存候。誰も高唱する人がないので、驚いてゐる位です。○小生ハ被害極めて少き方なり。併し商科大学が焼け、その構内の研究室も焼けたので、同所に置いた蔵書六段の大本箱につめたものハ、全部烏有に歸し候。これにはさしあたり閉口、それに自分の蔵本の外、慶大・商大より借入れし本も若干焼失、同大学の納屋に入置きしもの（雜誌及び和書）は助かりしが、取出の際地上に落ちしか焼けしが一部分損失、而して納屋ハ無事ニ残り候。ソロヒしものが半端ツツになりしには当惑、これも大本箱一杯有之候。死んだ子の年を数へると同じく、愚痴の話ながら、焼けたものがおしく、たま〜あの本を出さう（「読まう」ミセケチ）、此の本を出さうと、我家を捜すと（「読まうとすると」ミセケチ）、ホイアレも焼いた、之も焼いたといふ事にて口惜しく相成候。尤も小生が焼いたのハ主として洋書及び活版書（全蔵書の1/5位の冊数にして）ミセケチ）にて和書ハ少々也。まだ家ニハ相応ニあり。されど、此の位愚痴なれば、蔵書全部なくした人ハ嘸かしと同情に不堪候。○帝大図書館の丸焼も、史料編纂の残りしも、不思議といふべく、今度の火災は普通の火事と違ひ、石造も煉瓦も鉄筋コンクリートも安全といはれず、風の方向も滅茶〜にかはり、小生ハ一日・二日の両日は姉の宅（麴町・紀尾井町）と自分の宅との間をウロ〜致し、四日・六日・八日と三四日て親戚まいを致候。○六日向島の兄を訪はんとて両国を渡り、被服廠の傍を通り、惨憺たる光景を目撃いたし候。吾妻橋・厩橋落ちし為に、斯様な大迂回を致せしなり。

浅草の観音が残つて居るが不思議なり。○こんな事書けばいくらもあれど、もうやめます。地震騒ぎさへなけれバ、先月十日前後、授業始まる前、一寸御地に行く筈なりしも、一切水泡に帰したり。地震後あまり東京の殺風景なるを厭ひ、西遊せんとせしが、ソレにては余りノンキらししと妻共よりいはれ、又途中の混雑話をきゝて、恐をなし、遂に中止せり。焼失の為商大は十一月一杯休みなれど、慶応ハ焼けざりし為授業本（先「ミセケチ」）週より開始、商大へハ復興事業手伝として又夜警監督として、教師一同日を定めて呼出され、町内の夜警にも呼出され候。読書も殆と出来ず、友人慶大教授田中萃一郎氏死去のため八月の暑中（「ハ滅茶」ミセケチ）、箱根より帰り其の儘箱根に行かざりし、箱根の義弟宅は新築中（殆と成就）の三階ツブレ、召仕に男女四人の死者を出し候。慶大の学生と共に、本日にて二回、田中氏の遺書整理に著手候。これが本月にありて本を見た位なり。東京の本屋ハ（村口、浅倉、横尾、いそべや其他）殆と全焼、明治出版の活版本が大層高くなつた（小川町の本屋も全部焼失したので焼失本の再蒐集を鹿田君へ注文した処、馬鹿高なつ腕なたとの返事あり）といふことです。

十月十三日 幸田成友

上村閑堂様

奥様に宜敷、御令弟の方も御無事と存じますが、いかゞ。○在京都諸兄へも全然御無沙汰、自然御出会も有之候ハ、宜敷く。

8 近重真澄（大正二四年）五月二八日付 一九・四×五九・八糶、素紙一枚墨書

文中「誠拙」は誠拙周樗（二七四五〜一八二〇）、臨濟宗僧侶。円覚寺・相国寺で活躍、書画に巧みで、詩

文および和歌の集を残す。福山老叟（今井福山）「誠拙禪師忘路集提唱」が『禪宗』二九卷四号（三一五、大正一一年四月）から三二卷三号（三五九、大正一四年三月）まで断続的に三〇回連載された。

拜啓 新緑適意の節、雅台益御清祥奉賀候。然れは禪宗誠拙詩解満了大慶ニ存候。乃ち装釘せんと欲し、取調候処、大正十二年九月分ト存候講義第十五回、紛失致居り残念ニ有之、若し補ふことを得れば好都合と存之、御本御無心申上候。乍御面倒、御残部有無御調下され間敷哉。右御依頼まで。草々

五月十八日 物安

閑堂先生侍史

9 不明 某年某月某日 一七・二×四六・七糶、綠色纖維漉込料紙二枚継墨書

署名が難読。内容からすると東京在住の学者であろう。

拜啓 鉄齋居士揮毫ニ就ては信ニ御高配相蒙、多謝仕候。渴望を医し候。御礼乍ニ東京名物少許進呈仕度、小包便ニ托し申候。御笑納下され候ハゞ幸甚。 ■

上村老台侍史

10 鳥居素川 某年二月二〇日付 一八・一×五七・三糶、素紙二枚継墨書

一八六七〜一九二八。言論家。名、赫雄。熊本出身、大阪朝日新聞社主筆。大正七年米騒動の記事で筆禍

事件（白虹事件）が起き退社。文中「听叔顕暲」（中暲ともいう）は一五八〇〜一六五八、相国寺の僧。公家の日野輝資の子で、鹿苑院塔主として『鹿苑日録』の筆者の一人でもある。「五山文学」は『五山詩僧伝』（明治四五年刊）か。末尾に別号等の一覧あり。「雪溪」は雪溪集立（？〜一六三九）か。啓書記（賢江祥啓）は室町中期〜後期の画僧であり、時代が合わない。

拝啓 未得拝眉候へとも、夙に御高名拝承仕居候。偕突然之御尋ねに候へとも、

楽窩子。幻松。听叔顕暲

といふ禅僧は何書にて其伝記を調べ候へば宜しく候や。貴著五山文学末尾の索引の部にては唯以上の外分り不申候。伝記も欠如仕候間、甚た御手数に候へとも、御教示被下度、小生右楽窩子より雪溪禅師への書翰を所持し居、雪溪禅師は啓書記と存候也。拝具

十二月二十日 鳥居赫雄

上村賢台

11 鳥居素川 某年二月二十六日付 一八・〇×二八・一糰、素紙一枚墨書

書簡10の翌年に記されたものであろう。

尊書辱く拝見いたし候。御多用中御取調被下、難有々々。物ハ楽窩子より雪溪禅師への漢文書簡にて、文も書も逸品にて、楽窩子を知りたく御尋ね申上候也。右御礼迄。拝具

二月廿六日 鳥居

上村賢台

12 結城素明 某年九月一〇日付 一五・四×二二・〇糶、東京三越製一〇行青罽線便箋墨書

一八七五〜一九五七。日本画家。本名、貞松。東京美術学校助教教授（二九〇五〜一三三）および教授（二九一三〜四四）。文中「山田師」は大徳寺真珠庵住職の南山宗寿か。「皆々」というのは、東京美術学校の学生か。彼らを引率して京都・奈良の文化財見学の旅行をしていたものであろう。

残暑長く難凌事ニ御座候。過日は高野山上にて久々にて拝光、失礼申上候。下山後、新和歌の浦を経て京都へ参り、直ちに真珠庵を御尋ね仕候。山田師自身、大徳寺を初め塔頭の各寺院をご案内被下、残る方なく見物仕候。洵ニ御紹介被下候御蔭にて皆々喜居り候。御礼状後れ誠ニ申訳無之候。今秋ハ正倉院へ参り度、其節ハ御尋ね候者、拝光万謝申度候。敬具

九月十日 結城素明

上村観光様

13 藤井乙男 某年一二月七日付 一八・七×一二・五糶、鈴蘭（？）色刷下絵二行薄緑色罽線便箋ペン書

一八六八〜一九四五。文学者。号、紫影。専門は近世日本文学、俳諧研究の先駆者で、大学時代子規と知り合い、実作もよくした。京都帝国大学教授。文中「伊地知版」は文明一三年（二四九〇）薩摩において、

桂庵玄樹と伊地知重貞（島津家家臣）によつて刊行された『大学章句』のこと。日本における初めての新注（朱熹による注釈）の出版として知られる。

其後ハ誠に申訳なき御無沙汰、是非一度御伺可仕と存じながら、煙草をやめてから何だか他所へ行くが手持無沙汰のやうにて、いづ方へも失敬のみ致居候処、却而御尋に預り、御珍菓御恵投、偏に感佩の至に御座候。九州にてハ何か珍品御入手にもや。例の伊地知（「地」ミセケチ）版にても御発見無之かりしや。いづれ其中拝趨可仕、不取敢御礼まで。草々頓首

十二月七日 乙男

閑堂老兄侍史

14 和田万吉 某年六月二四日付 一七・六×七七・七糎、素紙二枚継墨書

一八六五〜一九三四。図書館学者。東京帝国大学国文学科を出て同図書館に勤務のかたわら、国文学・書誌学を研究、明治三〇年（一八九七）館長（後に教授）。日本初の図書館学の講座を担当する。大正一二年（一九二三）、関東大震災による焼失の責任を取つて翌年辞任、法政・東洋大学などで教える。文中「雀林玉露」は南宋・羅大経著の随筆『鶴林玉露』。詩文に関する逸話が多く、中世五山でもよく読まれた。古活字版は一八巻六冊、『東京帝国大学附属図書館和漢書書名目録 増加第二』（一九一〇）に載るが震災で焼失。なお成算堂文庫にも所蔵あり。「成算堂叢書」は大正二年（一九一三）から一年まで刊行された所蔵稀観本の複製。蘇峰・観光・森大狂らが解説を執筆。本書簡は刊行開始から間もない頃のものが。

貴論ノ如ク椽天甚陰鬱御同困御坐候処、執事益御清祥ノ段、欣賀ノ至拜上候。借来示之古本中、古活字版『雀林玉露』ハ弊蔵ニ完本有之候ガ、餘ノ四部五冊御譲受ヲ得ラレ候ハ、難有可存候。御序ノ折御送本相待候。次ニ徳富蘓峯君ノ成篁堂叢書ノ儀、弊館ニ寄贈ヲ得度切望仕候ガ、自然御都合ヲ以同君ニ御依頼被下間敷ヤ、直接当方ヨリ申出候モ如何ニ存候マ、右様相願候。只今迄該叢書ハ一冊モ入手不致候。拜答ヲ兼御頼迄。草々拜具

六月念四 和田

上郵賢台侍曹

15 和田万吉〔大正二二年〕一〇月一六日付 一八・九×九一・〇糶、素紙一枚継墨書

書簡7に同じく、関東大震災の惨状を報告した内容である。文中「石割火焚」は八大地獄の第三・衆合地獄を石割地獄、第六・焦熱地獄を火焚地獄ともいうもの。「弊屋付近無事」とあるように、和田自身の蔵書は無事で、戦時中東京都に買い上げられ疎開、現在も都立中央図書館特別買上文庫の一部として現存する。震災前の東京帝国大学附属図書館蔵書のうち、五山文学関係では東福寺の塔頭善慧軒（現在は善慧院 明暗寺）にいた彭叔守仙の旧蔵書がまとまって入っていたが、一点を残して焼失した。

拝復 益御清安奉賀候。借今回ノ凶変ニ付、懇到ナル御慰問ヲ蒙リ、御芳志深ク感荷致候。真ニ古今ニ絶セラル天災ニ而、一時ハ不安、奈何ニ成行クヤラント被思、石割火焚（煩）ミセケチノ大地獄ニ墮シタル感有之候。幸ニ弊屋附近無事ニ御座候ヒシガ、三十余年間監護セシ東大書城、忽焉烏有ニ帰シ、悔恨無限、今ニ

茫乎トシテ不知所為候。是迄貴兄ノ御厚意ニヨリ蒐集致来候佳書珍籍モ、一紙ヲ不遺亡失、誠ニ向顔モ出来ザル様ノ始末、不可抗ノ場合ト云ナガラ申訳无之トモ存候。震後建物大虧隙ヲ生ジ候為、火焰ノ廻リ早く、瞬時ニシテ不可救事ニ相成、僅ニ一万冊弱ヲ搬出シ得タル耳。実ニ御話ニモナラヌ次第、御憐察可被下候。本日館ノ残骸ヲ工兵隊ノ手ニテ爆破、無情ヲ感ジテ涙モ出ザル程ニ候。全市荒涼凄慘、トテモ難悉筆紙、委シクハ新聞ニテ御承知ト存候。近日御出京ノ趣、定而喫驚可被為遊ト察入候。御見舞拜謝迄取急申上候。拝具

十月十六日 和田万吉

上村仁兄梧右

16 幸田成友 某年二月八日付 一八・五×一一五・三糶、素紙二枚継墨書

震災後の消息を伝える。文中「義弟」は妹幸の夫安藤勝一郎か。「狩野博士」は狩野直喜（一八六八〜一九四七）。京都帝国大学教授。「池辺氏」は池辺三山（一八六四〜一九二二、朝日新聞社主筆）か。狩野とは同じ熊本県出身。「富岡邸」は富岡鉄斎（一九三七〜一九二四）も長子謙蔵（一八七三〜一九一八）も没後であろう。

「村口」は書簡7にも見える村口書房。

拝啓 御無音仕候。目下の御様子いかゞ。僕春来俗事のみにて（亡母の法事、義弟の洋行、姪の転地療養その他）少しも本屋まはりをせず、得る所なくて費す所のみ多し。何か面白き話も無之や。君の助手をしてゐた久家と申す慶應卒生も病歿の由聞及べり。まさか、ウソニはあらざるべく、一時ハ金松の世話で洋行す

るなどいふ風聞もありし男、アタラ才子を玉なしニシて仕舞ひけり。南無阿弥陀。狩野博士の夫人（池辺氏妹）も流感で逝去之由、狩野君自身の御病氣ハいかゞ。去年富岡邸へまゐりし時、やよひさん、二月頃結婚との話をきゝしが、愈々日取もきまり候ハ、心ばかりの祝物贈り度、様子御内報頼入り候。東京てバ、村口が三階造を新築する勢也。大兄の御新築いかゞ御すゝみ候哉。僕ハ只今居る家の後の極めて光線のワルキ家をかり、漸く慶應の荷物を引とり候。夜分ハソコへ閉籠りて読書いたし候。寒いので少々風邪引となり申候。富岡令嬢の事、何卒御知らせ頼入り候。乍末奥様に宜敷く。僕の長女も本春ハ学校を出る事にて、親父大分責任を感じ来り候。先ハ御無沙汰御詫旁々雑事のみ。頓首

二月八日雪降る日 幸田生

上村閑堂様

17 幸田成友 某年五月一八日付 一七・五×六二・一糶、素紙二枚継墨書

文中「姉」は延（のぶ、一八七〇〜一九四六）。東京音楽学校教授として活躍。大正八年辞職、審声会を作り後進を指導。

拜啓 先日入洛之節は大御馳走ニ与り満悦仕候。廿五日正午過無事帰京ノ処、小子留守中、姉流行感冒ニかゝり、帰京当日より熱度昂進、肺炎ニ変じ、死地ニ入るもの二回、現在は病勢の減退と共に身体非常ニ衰弱、然しコレデ食慾さへつけバ大丈夫との事。殆ど毎夜姉方ニ宿直し、右の有様にて帰京後御礼も不申上、甚だ失礼仕候。御宥恕所祈二候。榮あれば苦ありと申せ、コレハ又余リヒドキ変化にて、少々頭脳もボンヤ

りいたし申候。ドウカ恢復するやうにと祈念致居候。先ハ近況御報まで。五月十八日

五ノ十八 幸田生拝具

上村閑堂様

18 辻善之助 某年七月一〇日付 一八・九×八〇・五糶、素紙二枚継墨書

一八七七〜一九五五。歴史学者。日本仏教史・文化史分野で活躍。東京帝国大学教授、史料編纂掛事務主任（後の史料編纂所長）を務める。文中「慶仏」は鎌倉時代の仏師快慶のこと。薩摩川内市に快慶入定の石室が、南さつま市（坊津）の広泉寺には伝快慶作阿弥陀如来がある。「小島師」は小島文鼎。相国寺長得院任職で、禅宗史研究者。『禅宗』にもたびたび寄稿している。「桃隠」は桃源瑞仙の誤り。「史記抄」「百衲襖」は桃源の抄物。「翠竹真如集」は建仁寺の僧天隱龍沢（一四二三〜一五〇〇）の語録。史料編纂所（「史局」）には観光所蔵本を大正一〇年一〇月に謄写した本あり。したがって本書簡はそれ以後のものである。

七日の御書拝見致候。薩摩慶仏の件について小島師へ御照会被下、御手数数の段深謝の至ニ存候。全師指示に従ひ、薩摩の方へ依頼試みるべく候。全師へ宜く御伝声願上候。雑誌二冊難有存候。次に桃隠事蹟の出所御教示難有存候。早速史記抄・百衲襖等見可申候。次に翠竹真如集は仰の通、既に史局に写済ニ相成居候。灯台下暗の譬、汗顔の至ニ候。実は図書目録を見候処無之候為め、全く無きものと思ひ目録編成後、新追加の分を見ざりし過に候。御手数数相かけ奉謝候。先ハ右御礼のみ。早々

七月十日

辻善之助

閑堂老兄座下

19 黒板勝美 某年一月一日付 一九・七×九二・〇糶、素紙三枚継墨書

一八七四〜一九四六。歴史学者。専門は日本史全般にわたり、また古文書学を開拓、名古屋真福寺など寺院資料調査およびその保護にも努めた。東京帝国大学教授、史料編纂官。文中「キサ、ギ」は植物の名。キササゲとも言い、その実を利尿薬として用いる。「辻氏」は辻善之助であろう。

肅啓 一昨夜ハ態々御来訪、却つて恐縮之至候。然ハ御病状如何ニ候や。一日も早く御診察を受けられ、御快復之程奉祈候。又腎臓病ニハ、烏丸二条角和葉屋特売のキサ、ギ、特効候由、辻氏の如き常用者の証言する所ニ有之、煎薬として至急御試ミありてハ如何。尤もそれにて多少快く候とも、医師ニハ御かゝりある様勧め申上候。唯今ハ稀珍の書御惠贈被下奉謝候。先ハ御礼旁御見舞候。恐々謹言

十一月十日 帰東ニあたりて 勝美

上村老兄梧右

20 島文次郎〔大正八年〕二月三日付 一七・九×八一・一糶、素紙二枚継墨書

一八七一〜一九四五。号、華水。文学者。専門は英文学。伝記は廣庭基介「島文次郎京都帝国大学附属図書館初代館長年譜について」(『花園大学文学部研究紀要』三二、二〇〇〇・三)に詳しい。それによると、佐

賀藩家老諫早氏に仕えた学者野口松陽の次子として生まれ（長兄は野口寧齋）、志士島惟精（維新後は元老院議員）の養子となり、帝国大学文科大学および大学院を出て京都帝国大学附属図書館初代館長、同文科大學助教、第三高等学校教授等を歴任。大正八年三月から九年一二月まで欧米留学。本書簡はその直前のもの。文中「佐々木」は京都の古書店佐々木竹苞樓、「吉沢君」は国文学者吉沢義則。「桃華」は富岡謙蔵、大正七年一二月二三日没。

寸簡呈上。寒威凜烈、折角之雪景色モ賞美の勇モ不出、御憫笑被下度候。然ハ 大兄ニハ益御康壯、大賈之至御座候。扱今回ハ遂ニ辞退ヲ不得、出廬東征致候ニ就てハ、告別方高屋御過訪可仕候処、何カニ取紛れ延引致居候。実ハ彼地学者達へ説明旁贈物とし而我古文書類少々持参致度存候が、固より何種ニテモ不苦、年代さへ古ければ宜しく候が、御所蔵中御不用ノ分御割愛願上度、なるべく（正式ノもの宜しけれど）仮名文書ニテモ可ナリ。花押其他一枚ニテ具備せるもの宜しくと存候。総額ニテ参拾円だけ、枚数ハなるべく多き方宜しく存候。写経ハ定めし高価なるべく、佐々木ニ多分有之候由、吉沢君ノ談話に候が、拙モ話にハなるまじくと相諦申候。要スルニ多忙ノ際他之方法無之候まゝ、御任侠ニ訴へ候次第、御一臂ノ勞を惜まさらん事願上候。桃華モ登仙シテ正ニ五十日ナラントス。大兄不相変悠然トシテ酒盃ニ親まれ居候や。余りに御疎遠打過候まゝ、前記御依頼を兼ねて御起居御尋申上度、勿々頓首。

二月三日 華水生

閑堂先生凡右

執筆者一覧（五十音順）

竹下 ルツジエリ・アンナ 京都外国語大学准教授

館 隆 志 花園大学国際禅学研究所客員研究員

堀川 貴 司 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫教授

林 観 潮 厦門大学副教授

花園大学国際禅学研究所論叢 第十二号

二〇一七年三月三十一日発行

編集兼
発行者

花園大学国際禅学研究所

〒〒162-8601 京都市中京区西ノ京壺ノ内町八十一

花園大学内

電話 〇七五―八二三―〇五八五

FAX 〇七五―八一―九六六四

印刷 河北印刷株式会社

日本の禅宗における女性観

—白隠禅師の場合— (3)

竹下 ルッジェリ・アンナ

はじめに

本論では「日本の禅宗における女性観—白隠禅師の場合— (1)」(『論叢』第九号) 及び「日本の禅宗における女性観—白隠禅師の場合— (2)」(『論叢』第十号) の続きである。前論では白隠慧鶴禅師(1685-1768)の女性観について考察しながら、仏教と禅宗における女性観の背景および禅師の女性弟子の代表であるお察(1)、そして恵昌尼(2)について調べた。今回は、政女および大橋女(出家後に慧林尼)に関わる情報を集め本論を作成した。

前回と同様に、白隠禅師の作品を分析したうえで、このテーマについてすでに論じた論文を参考にした。特にこのテーマを扱った学者は、芳澤勝弘氏と故町田瑞峰氏、常盤義信氏の三名である⁽¹⁾。彼らの論文は白隠禅師の女性弟子たちに関する情報、そして白隠の言葉を理解することにあたって非常に参考になった。

本論は新しく発見された資料を紹介することを目的としておらず、白隠禅師の女性弟子の生涯を通して、白隠自身の女性観を明らかにすることを目指している。従って、以前に書いた論文と同様に、白隠禅師の弟子を紹介してから、禅師の思想・教えについて考察した。

白隠禅師の女性弟子についての記録とその資料

白隠禅師の女性弟子については、主に白隠の大高弟東嶺円慈(1721-1792)が著した『白隠和尚年譜⁽²⁾』(正式名は『龍澤開祖神機独妙禅師年譜』、

1820) および白隠下四世の妙喜宗續 (1774-1848) による『荊棘叢談⁽³⁾』(1842) に記録されている。後者には白隠門下の尼僧と大姉を合わせて五人の女性が登場する。彼女らは、お察 (阿察婆)、そして原駅の婆、恵昌尼、政女と茶店婆の五人である。『年譜』では、さらに大橋女 (後に慧林尼) について書かれているが、原駅の婆と茶店婆の話は記されていない。『年譜』が口伝されたことは考えられないことから、この二人の消息が晩年のお察と紛淆していると思われる。相国寺の荻野獨園による『近世禅林僧宝伝⁽⁴⁾』(明治23年、1890) には、『荊棘叢談』の孫引きのように見えるので、女性五人伝のみ記載され、大橋女について何も書かれていない⁽⁵⁾。また森大狂居士が著した『近世禅林言行録⁽⁶⁾』(明治35年、1902) にも同様である⁽⁷⁾が、同じ森大狂著の『近古禅林叢談⁽⁸⁾』(大正8年、1919) には、前記の五人女性⁽⁹⁾と共に『年譜』に紹介された大橋女⁽¹⁰⁾の話も見られる。そして、小畠文鼎による『続禅林僧宝伝⁽¹¹⁾』(昭和13年、1938) に上記の女性弟子が載せられていない。

政 女

白隠禅師の女性弟子の中には、杉山政女がいた。政女は比奈村 (現在静岡県富士市比奈町) の人であった。夫の死の後に、一人の子供と暮らしながら、修行を始めた。白隠禅師の『年譜』では1730年、つまり禅師の46歳 (満年齢45) の箇所に来歴されている。

比奈村の杉山氏の寡婦政女は、解脱の勧めによって、実に熱心に参禅していた。時には数日のあいだ身心を忘れるほどであった。その子供は毎日、手習いに行っていたが、子供の食事を用意することさえ忘れるので、隣人が可哀想に思っ、政女に代わって食事を与えるのだった。ある日、子供が家に帰って来た。政女は我が子であることも分からずに、「おまえはどこの子じゃ」と。子供が、「この家の子だ。おっ母、何でこんなことを言うんだ」と言うと、政女はウンウンと言って、また三昧に入ってしまう。こんな状態で数日、ついに省発すると

ころがあった。そこで白隠老師に謁して見解を呈した。白隠がいくつかの機縁をもって点検すると、一つも疑滞するところがなかった⁽¹²⁾。

政女は「解脱の勧め」（「脱公點發⁽¹³⁾」）によって修行に取り組んでいたということであるが、解脱とは無量寺の超宗解脱首座（生没年未詳）のことである。独園元利の弟子に当たり、1715年（正徳5）示寂後に清見寺陽春主諾の元に至り、この年に白隠禪師に入門した僧侶である⁽¹⁴⁾。参禪に励んで政女は、身心を忘れるほどの公案三昧に入り、大疑を起こした。自分のことだけではなく、子供のことさえ忘れるほどの状態であった。社会的な面においては倫理的な問題が生じかねない行動であるが、禪の修行の立場から考えると、このような身心の状態がなければ、公案を透過することができないのである。

白隠禪師も時折引用する曹洞宗の道元禪師の有名な言葉を引例すると、「仏道をならふというふは、自己をならふなり。自己をならふといふは、自己をわするるなり。自己をわするるといふは、万法に証せらるるなり。万法に証せらるるといふは、自己の身心および他己の身心をして脱落せしむるなり⁽¹⁵⁾。」という心境は政女にも当てはまると思われる。白隠自身は上記の道元禪師の言葉を他の作品にも引用し、例えば『於仁安佐美』巻の下では、「道元禪師が『自己を運んで万法を修証するを迷いとす。万法すすみて自己を修証するは悟りなり』と言ひ『身心脱落、脱落身心』と言われたのも、この三昧のことを言ったものである⁽¹⁶⁾」と述べる。白隠による「此ノ三昧⁽¹⁷⁾」とは「宝鏡三昧」のことであり、「四智」に導く本来の公案の工夫に関する説明の一部である。本論の最後にこの内容について考察した。

政女の体験に基づくもう一つの側面があると思われる。禪に限らず、宗教の世界に入門することであり、安永祖堂老師に次のように説明される。

そもそも宗教にかかわるといことは、とりもなおさず人間世界を超える大きな力にからめとられることに等しい。宗教に生き、宗教に死のうと誓いを立てる者は、肉親との恩愛も自己にたいする愛着も断つ

覚悟を迫られる⁽¹⁸⁾。

その後、安永氏は「ルカの福音書」を引用する。

だれでも、父、母、妻、子、兄弟、姉、妹、さらに自分の命までも捨てて、わたしのもとに来るのでなければ、わたしの弟子となることはできない。

(「ルカによる福音書」十四-二十六⁽¹⁹⁾)

政女は大姉として禪修行を歩んだが、上記のような心境をもったと推測でき、白隠禅師の下で修行の深いところまで至っていたのである。

また『年譜』で、政女の修行に関わるエピソードが語られている。引用すると、次のようである。

ある日、金剛寺の雲山和尚が松蔭寺に来ており、白隠の後ろに寝転んでいた。そこへ政女がやって来て入室を乞うた。雲山がどこかへ行こうとすると、白隠が「かまわん」と言うので、雲山はそのまま平然と寝転んでいた。政女が入って来た。白隠が拶して言う、「夢中の西來の意、作麼生」。政女が見解を呈する。白隠はそこで休した。政女は辞して出て行った。これを見ていた雲山は驚いて起き上がり、「あの女は何のものだ」と。白隠がこれこれしかじかと告げると、雲山は嗟嘆して言った、「あれほど作略が純真で、風も漏らさぬような者は初めて見た」と⁽²⁰⁾。

この出来事から、興味深い白隠禅師の参禅の様子が伺える。白隠の部屋に横になっていた雲山和尚は、雲山祖泰(1685-1747)のことである。駿州の人で、古月禅材(1667-1751)に参じ、後に永明寺鉄船玄迪の後を継いで金剛寺三世住職となった。白隠禅師と同年であって、幼年時代から親しかったが、62歳(満年齢61歳)の時に示寂した⁽²¹⁾。白隠は雲山の頂相に着賛し、その内容は次のようである。

仏日雲山和尚

古風な道風、清らかな気宇。

かつて九州の古月和尚に参じて得語したが、

駿河に戻って来て、わが白隠下に参じ、その余蘊を尽くし、向上の玄関を透った。

それ以来、諸方の枯木禅を批判し、

時には、天性の絵筆の才を生かして、近隣の和尚方の頂相を描いたりもした。

私とは幼なじみ、四十年にわたる心交。別れに臨んで、涙があふれてとまらぬ。

その弟子たちが、頂相に賛することを求めて来た。

徳倉普光寺の国禅法均和尚が定中に入って描かれた頂相である。

これに私白隠が睡裏の狂言のごとき言葉を書きつける。

賛を書き終えぬうちに、うとうと居眠り、

夢で雲山和尚と相對して、互いになっこりと笑った。

覚めてみれば、老涙、衣袖に満つ、時に七月二十二日正午⁽²²⁾。

この白隠の頂相の賛から道友の雲山との絆が伺え、白隠の部屋で寝転んでも不思議ではないであろう。その時に入って来た政女が自分の公案の理解を点検するために、『お婆々どの粉引き歌』にも述べられている⁽²³⁾「夢中の西来の意、作麼生」という拶処を与えられ、その答えは驚くほどのものであった。

政女は、白隠禅師に会うために、原の松蔭寺と比奈村の何十キロもの距離を歩き、参禅を求めていたと考えられる。参禅が終わってから、また比奈村に戻り、自宅などで坐禅三昧に入り、公案を拈提し、また参禅のために松蔭寺に行っていたのであろう。残念ながら白隠禅師と政女との出会いについては『年譜』の記録から推測するしかない。禅師が『兔専使稿』で説明する「ただ大勇猛心をもった真の修行者だけが、難透の公案に取り組み、一切の旧見を棄て大疑団を起こして、単々に参究し、そして蛇が竹筒に入ったようになることができよう⁽²⁴⁾」という根性が政女にあったであ

ろうと思われる。

実は政女についての話は、『年譜』の外に『荊棘叢談』にもあるが、『年譜』の孫引きと見られる。しかし、『年譜』と『荊棘叢談』に注目すべきだと思われる一つの相違点がある。政女に対する雲山の感嘆を表す表現は、『年譜』には「あれほど作略が純真で、風も漏らさぬような者は初めて見た」（「我未見如彼作略純真而不通風者」）であるが、『荊棘叢談』には「女性とはいえ、まことに雲水のはたらきがある」（「彼雖婦女実有衲子作略」）になっている⁽²⁵⁾。女性である筆者から見れば、この点においては『年譜』と『荊棘叢談』の女性観の違いが感じられ、『荊棘叢談』には当時の女性に対する見方が入っており、『年譜』には白隠とその高弟子である東嶺に、読み取れる修行に対する男女区別のない女性観が見られる。『年譜』と『荊棘叢談』のこのような女性観の違いはお察の伝記にも感じられる⁽²⁶⁾。

後の禅籍では、上記の政女に対する雲山和尚のコメントは『荊棘叢談』のバージョンになっていて、残念ながら『年譜』の言葉は見られなくなった。

大橋女（後に慧林尼）

大橋女（年没年不詳）の本名は「律」で、後に浪人になる江戸の旗本の娘であった。晩年に尼僧になり、白隠禅師に参じた。彼女の来歴は『年譜』に書かれているが、前述したように『荊棘叢談』に記されていない。

大橋女は白隠禅師の時代に有名な人であった。禅師の『年譜』によると、白隠は67歳（満年齢66歳、1751）の時に大橋女に出会った。この出来事に関しては、次のように書かれている。「帰路、平安城に過ぎる。世継氏に館す。池大雅、来たり参ず。及び大橋女を度す⁽²⁷⁾。」前の年の冬に、白隠禅師は『虚堂録』を講じるために播州明石の竜谷寺におり、そして年明けて備前岡山と井山に行った。その年の四月に、竜谷寺の虚堂録会の際に参じて来た京の豪商の世継政幸とともに京都に戻り、世継の自邸に泊まった。京都に滞在中の際に、上記したように禅師は大橋女にも会った。白隠は京都滞在中、妙心寺の養源院で『碧巖録』を講じたが、おそらく大橋女はこの

法座と他の行事にも参加したのであろう⁽²⁸⁾。

加藤正俊氏と芳澤勝弘氏が説明するように、一般的に知られている白隠禅師の『年譜』以外に、別に『勅謚神機独妙禅師白隠老和尚年譜』という写本が存在する(京都、法輪寺蔵)⁽²⁹⁾。この写本は東嶺によって書かれたものであり、その弟子の大観文珠(1766-1842)によって編集された。これは学者たちに『草稿』と呼ばれ、『年譜』より史料として豊かであると思われる。その違いは大橋女の説明にも見られる。もっとも目立つのは名前の違いである。『年譜』では大橋女と記されているが、『草稿』では高橋女になっている。この相違はなぜ生じたか不明であるが、大橋が正しいと思われる⁽³⁰⁾。

大橋女はどういう人物であったのか。『年譜』と『草稿』の内容を合わせた芳澤氏の現代語訳を見てみよう。

大橋女はもとは江戸に住まいする旗本某甲の娘だった。父は千石余を食んでいたが、何らかの事情あって浪々の身となり、京都にやって来た。収入がないものだから、娘は弟とともに乞食までして家計を助けたが、それでも衣食ともに足らぬ赤貧のありさま。娘は一家を救うため、自分を遊女屋に身売りするよう父母に申し出たが、父母は、わが子を売って生きるなど畜生の業、と許すはずもない。娘はさらに、「これというのも方便、もしお許しにならなければ、一家ともに死ぬだけです。方便は真智には及びませんが、死の難を免れることは道にかなうのですから、これも真智ではありませんか」と説得するので、父母も泣く泣くこれに同意し、遊廓に送ったのである。

女は、もとより教養があり、書も和歌もよくしたので、やがて島原の名妓大橋となった。しかし折りに触れて思うはわが身の上。もとはといえば侍の家に生まれ、深窓に養われ、女中にかしずかれる身であったのに、今はかかるうき川竹の身、何と情けないことか、と。やがてこの煩悶が積もり重なって病となり、医者も手をこまねくほどになった⁽³¹⁾。

ここまでの『年譜』および『草稿』の説明から、大橋女はどういう人だったのか明らかになった。望んでもいない生き方を仕方なく歩み、深い実存的な悩みによって心身の病に落ちることに至った。しかし、禪の世界でよく見られるパターンであるが、病に導いたこのような深い悩みと苦しみがあったからこそ彼女が次の次元に入境することができたと見えよう。その後、ある時、名前の不明な貴客が大橋女の悩みと苦しみに気づき、彼女にその病悩から脱け出す方法を教えたという。客は次のように述べた。

「そなたが、我が身と思っておるものは、すべて見聞覚知の四つに他ならない。けれども、この四つのを司る主人というものがあるのだ。これから先、行住坐臥、見るもの何ものぞ、聴くもの何ものぞと、切々に返観して怠らないならば、いずれ本具の仏性が忽然として現前するであろう。そういう境地になれば、苦界を脱することができる」と(32)。

その後、大橋女は教えられたように毎日工夫し、ある時に大事な体験をしたという。『年譜』によると、次のようである。

[…] 延享のころ（一七四四～四七）のある日、狂雷が京の都を襲い、二十八ヶ所に落雷した。大橋は生まれつき雷が嫌いだったので、蚊帳に入り布団をかぶって、左右を小婢従女に護らせて避難していたが、ハタと思うところあって、起き上がると端然と静坐した。やがて狂雷がにわかに庭に落ちた。たちまち大橋は仰顔気絶した。しばらくして蘇ったのだが、何と、見聞するところ、以前とはまったく異なるのである。この不思議な体験を、どなたか明師にお話しして、自分が味わった境地が何なのか証明してもらおうと思っていたが、廊暮らしの身ゆえ、それもかなわず過ぎていた⁽³³⁾。

以上の記述を読むと、大橋女は白隠禅師による「大死」または「大死一番」を体験したと思われるが、遊郭で暮らしていたため、その体験を解明

してもらふことや認めてもらふことができなかった。

これについては、また『草稿』と『年譜』に違いが見られる。『草稿』では大橋女の体験は次のように述べられている。

頻りに震るい地に落つるもの一声、二三間を阻つ。高橋、地に絶す。
暫くあつて帰覚す。悟、前見に異れり。是より耳根円通を修す⁽³⁴⁾。

大橋女はまだ遊郭にいたころ、そしてまだ師に導かれていない時にも関わらず、「悟」の体験をしたということである。つまり、『草稿』の著者である東嶺と当然のことながら彼の師匠である白隠禅師は女郎の過去がある女性を受け入れ、まだどの師匠も出会っていないうちに体験した悟りを認めたのである。女性に対して儒教的な「三従」および仏教的な思想である「五障」が一般的であったその時代を考えれば、注目すべきところだと思われる。

白隠禅師が大橋に出会ったとき彼女はすでに遊女をやめていた。『年譜』では次のように述べ続けられている。

そのうちに、ある人に身請けされ、その妻となったが、やがてその夫も歿した。その後、栗原一素居士という者に再嫁した。栗原は大橋に誘われて、いつも白隠禅師に参じたという。大橋は、後に一素居士に乞うて尼となり、慧林と名のつたが、居士に先だつて死んだ。一素居士は白隠禅師の弟子である東嶺に焼香を頼んだ。東嶺が一素居士の家に行ったところ、位牌の代わりに、ただ観音像の軸が掛かっているだけである。東嶺が「位牌はどうしました」と尋ねると、居士は「普門品には応に婦女身得度者、即現婦女身而為説法とあるが、慧林尼こそは観音の応現だ。だから観音像を掛けてあるのだ、何もおかしなことではない」と答えた。東嶺もこれを聞いて黙って香を拈じた⁽³⁵⁾。

一素居士は鳩摩羅什訳の『妙法蓮華経』(406)の「観世音菩薩普門品第二十五」を引用していた。一般的に「観音経」と呼ばれ、『法華経』の中

では最も新しい部分に当たっている⁽³⁶⁾。一般民衆における観音信仰の根幹である。この品の内容であるが、無尽意菩薩は仏に向かって、観世音菩薩が何の因縁によって、観世音と名づけるのか。また、観世音菩薩は、どのようにしてこの娑婆世界を巡り、どのようにして人々に教えを示すのかという問いに対し仏は答えの一部として、「長者・家長（居士）・長官・官吏（宰官）・婆羅門の妻の姿によりて救われるべき者には、直ちに妻の姿を現わして一向に法を説き示す⁽³⁷⁾。」一素居士にとってはまさしくその通りと信じ、出家後に慧林尼になった大橋女のことをそのような菩薩に例えた。『年譜』にあるこのような説明を読むことによって、大橋女後に慧林尼に対する白隠禅師と東嶺禅師の尊敬が読み取れる。さらに、『年譜』に一人に対してこのように詳細な説明は珍しいことから、上記の印象は強まるのである。

『年譜』と『草稿』の違いとしては、大橋女の二代目の夫である栗原一素居士の名前にも見られる。『草稿』で一相になっているようである⁽³⁸⁾。『年譜』で書かれているように東嶺は大橋女の夫に、彼女のために焼香を頼まれたにもかかわらず、その名を間違っして記した。理由は不明である。

大橋女は遊女になる前の武家の娘としての教養も関係するが、和歌と書画に優れていた。しばしば、日本美術の本に引用され、日本近世絵画史の専門家であるパトリシア・フィスター氏の『世の女性画家たち—美術とジェンダー』で大橋作の『梅図』が載せられている。個人蔵の紙本墨画（93×28.3cm）で、次のような歌が添えられている。

梅のはな
たか袖ふれし
にほひぞと
春やむかしの
月にとはばや⁽³⁹⁾

絵には、梅の花が咲いている幹から左上方に向かって伸びる細い枝が描かれている。さらに、紙の右下に描かれている幹と伸びる枝の間の少し上

に薄い墨で掠れかけた筆で描かれた満月も表れる。この画を分析したところでフィスター氏は、狩野派の影響が見られると言う。さらに、「彼女は狩野派の無名のもとで学んだのではなかろうか⁽⁴⁰⁾」とフィスター氏は推測する。

大橋女は伴蒿蹊（1733-1806）の『近世畸人伝』（1790）にも記述されている⁽⁴¹⁾。『近世畸人伝』とは江戸時代の多彩な人物百余人の伝記を集めた五巻の伝記集。さらに、『続近世畸人伝』があり、これも五巻で人物百余人の伝記を集めているが、三熊思孝編のものである。収載人物は、文学者、学者、詩人だけではなく武士、商人、職人、農民、僧侶という幅広く社会の階層の人たちが取り上げられ、婢女と遊女まで載せられている。大橋女と共に同じ時期に白隠禅師に参じた池大雅の伝記も記されている⁽⁴²⁾。『近世畸人伝』の最後の伝記は、白隠禅師の『夜船閑話』（1757）に現れる白幽子のものである。ここでは白隠禅師の名前が記されており、『夜船閑話』の話がまとめられていると見られる⁽⁴³⁾。

大橋女の『近世畸人伝』による伝記においては、次のように述べられている。

都島原の遊女大橋、実の名は律、もと彼所に大橋といへる名妓あり。うたよみ手書ぬるが、その手ことによければ、大橋やうといひていまに伝はるよし。此妓もその名を嗣るとなん。よろづみやびを好めり。さばかりの女なれば、中々につひのよるべもなかりけらし、尼にならんとおもへるを、老たる母のためいかにとためらふほどに、栗原一素といへるは、世のすねものにて独あるを、よき戯がたきなるべしと人あはせけり。[...] かたみに才をたゝかはしけるが、後に夫婦つれて有馬の湯に浴し、妻はそこにて髪をおろしたり。さて禅にも参じて、白隠和尚京師逗留の日はつねにまうでしに、折々冷泉寂靜入道殿に出あひまらせしかば、和尚、此尼はもと島原の名妓なり、と語られしほどに、入道殿、さらばむかしのなげぶしといへるものを覚えたらん⁽⁴⁴⁾。

この伝記で注目すべき点は『年譜』に記されてなかった「老たる母」がいたことと冷泉家の下で歌を勉強していたということである。大橋女の歌は他に残っていると思われるが、これに関しては、町田氏は次のように述べた。

静岡の故秋山寛治氏より、大橋女の歌集が禅文化研究所資料室に所蔵されていると仄聞したので、借覧を申しこんだが、ないとのことである。恐らくはどこかに在ることと思うが、知聞する読者があつたらご教示を仰ぎたい⁽⁴⁵⁾。

残念なことであるが、未だにこれについて新たな情報がない。

また芳澤氏は加藤正俊氏が架蔵した大橋女の書蹟を見たという。歌は次のようなものである。

はとのつえといふ事を 句のかしらのつぎの字にを
きて 松年久といふ事をよみて奉る 恵琳
とはに懸けて ちとせかそふる この宿の
まつのさかへの すえそ久しき⁽⁴⁶⁾

慧林の名前に関しては、漢字が通仮字によって、混用されてきた。ちなみに、町田氏の論文では、「恵林尼」が使われた⁽⁴⁷⁾。また、加藤氏の『白隠和尚年譜』の注にも「恵林尼」となっている⁽⁴⁸⁾。

最後に、白隠禅師の和歌集である『藻塩集』を見ると、慧林に関わる歌がある。

慧林いかにや歌よみかけたりけむ岩つゝじの返して
予がかごにあつらへおこしければ
春に逢ふ うき世の花と みやま木と
いざさしよりてあだくらべせん
岩つゝじ 慧林

人しらぬ みやまのおくの 岩つゝじ
あだにやさきて あだに散らむ(49)

この歌はいつ作られたか不明であるが、『藻塩集』は宝暦9年(1759)に上梓されたということは序から明らかになっている⁽⁵⁰⁾。つまり、白隠禪師が京都で慧林尼に会った8年後のことである。この歌は、慧林尼俗名大橋のための歌かどうかよく分からない⁽⁵¹⁾。

大橋女についてはまだまだ分からないことが多くあるのではないかと思われる。

大橋女の人生をもう一度考えてみると、彼女は武家の娘として生まれて育てられ、高いレベルの教養を受けたにも関わらず、父親が浪人になったせいで京都に移り住み、家族を餓死から救うために京都の遊郭である島原に売られる。家族に対する深い愛情によって生まれた選択であったが、彼女は自己犠牲となるのである。身体は死から免れたが、心は自分の自己認識および元の芸術的な才能と実際の生き方の大きなギャップによって破壊されつつあった。ここで無常を感じ、生きることに対する希望と意欲がなくなったに違いない。何もできなく縛られているような心の状態から工夫方法を教えられ、この工夫に対する大信心と実践によってある日常的な出来事である落雷で自己の死とその蘇生に至った。禅的に言い換えれば、「大死一番」を体験した。しかし、白隠禪師によれば、この境地で止まってはいけない。修行を続ける必要があり、これは「悟後の修行」という。

大橋女は最初の体験にとどまらず、二度の結婚の後に出家し、慧林になり、修行を続けたのである。そして、人生の最後の時期に白隠禪師に出会って、師に参じてから、『年譜』の説明によれば一年余りで逝去した⁽⁵²⁾。確かに禪師に出会ってから、接したであろう時期は短いのであるが、なぜこのような禅者が『荊棘叢談』や『近世禅林僧宝伝』、『近世禅林言行録』に記されてないのか疑問に思われる。

老若男女を超えた白隠禅師の修行方法

政女と大橋女の伝記から読み取れた、「大疑団」と「大死一番」は白隠禅師による修行過程の重要な点である。禅宗では「大疑」や「疑団」とも呼ばれ、人生そのものに対する大きな疑問の固まりであり、「疑うそのものに成り切って徹底的に疑いを尋究する⁽⁵³⁾」や「悟境に入る直前の疑いの状態⁽⁵⁴⁾」ということである。本来の真剣に修行する姿を示している。直接白隠禅師の説明を引用すると、次のようになる。

どうしたら、その大疑の喜びを味わうことができる。大疑の下に大悟有り、と申しますように、大疑団をおこすことです。今、この文を読んでいる、その主体は何か。日常生活においても、笑ったり悲しんだり、外界の事象にそれぞれ応じて働いていくもの、それはいったい何のものか。これは心か、性か。そのものは青黄赤白の色があるものか。内にあるのか外にあるのか、それとも中間にあるのか、と。その根源を、何としても一回、はっきりと見届けずんば措くまじと、一日中、絶え間なく励み進むならば、いつしか、あれこれ妄想し思う心もなくなり、一切の疑団もなくなり、一念も生ぜず、男もなければ女でもない、賢くもなければ、愚かでもない、生もなければ死でもない、心はひたすらカラリとして、昼夜の分かちもなく、心も身体もともに消え失せたような、そういう心境を、幾度も味わうことができるでしょう⁽⁵⁵⁾。

そのような真剣な修行における心境に入ると、疑団そのものもなくなり、「男にあらざ女にあらざ、賢にあらざ愚にあらざ、生ある事を見ず、死ある事を見ず⁽⁵⁶⁾」、すなわち不平等差別も不差別平等も、心も身体も消えるのである。

その次に、上記の大橋女が体験した「大死一番」とは、「肉体的な死ではなくあらゆるものを捨てきった境地で初めて得られることを言い表したもの⁽⁵⁷⁾」というのである。前述したように、「大死」とも呼ばれる。

これについて白隠禅師は『於仁安佐美』巻の下で次のように述べる。

つらつら思うに、参玄の上士は大死一番して、命根を截断するところを経験せねばならぬ。「懸崖に手を撒して、絶後に再び蘇える」というところである⁽⁵⁸⁾。

政女と大橋女が体験しているこのような大疑団と大死一番は、白隠禅師の説明では公案の修行に関連しており、その工夫から離すことができない。さらに、この体験に止まらないことが大事であるということを白隠は強調する。『於仁安佐美』巻の下での説明がこのように続く。

このような境地に至ろうとするならば、一気に進んで決して退かないことが肝心要である。往々に、公案に参究じて自己の一大事を究明して、実参の功夫を積み、日常の行ないの中でひそかに仏法の行持を勤めることによって道力が充ちいて来れば、万里も続く幾重にもうち重なった氷の中にいるようで、身心も公案もすっかりなくなり、底のない黒暗坑に墜つたようになることがある。多くの者はたちまち恐怖の心を生じて一步も進むことができず、頭をかきむしって懊悩することであろう⁽⁵⁹⁾。

それでもまだ工夫を進まなければならない。

しかし、そこに留まってしまうならば、いつまでたっても大歡喜を得ることはできない。そこは、百尺の竿の先に達した者が、そこから更に一步を踏み出すことによって、十方世界がそのまま我が身の現われであるという境涯になる直前の一瞬の境地なのである。そこに留まっていたはならない⁽⁶⁰⁾。

大疑団および大死一番の次に白隠禅師は大歡喜について述べている。白隠は、公案の正念工夫や見性、大悟、さらに悟後の修行など、どの作品に

においても強調し、それらに基づく精神的な過程について説いている。この過程は、大疑と大死、大歓喜の「奥義体験」と定義付けている体験も含んでいるとする。白隠は、こうした体験を非常なる精神の緊張状態までもつていく、公案の絶え間ない工夫における、個人の内的経験の行程として記述している。このような精神の状態を大疑と定義しているのである。習慣的に思い込んでいる事象を疑いに疑い抜き、その限界点まで疑い抜くことが大疑である。そして、この「疑団」とも呼ぶ状態を打破し、心の真理をつかむことは、公案の見解を見つけることと一致するのである。

なぜならば、公案こそが、最初の大疑を生み、最後には大疑を打破するための必要な中心課題なのである。大疑の後に大死があり、大死の後に大歓喜があるといわれる。この三つを白隠禅師は、見性と大悟の教義の支柱として構築した。白隠によれば、見性の体験をするためにも、最初の段階である大疑は絶対に必要である。白隠の功績は、その弟子達に大疑を抱かせることに成功したからである。さらには、見性の深さはそれに先立つ大疑の深さと同等である。白隠にとって公案というものは、知識として学ばれるものではなくて、それによって全身的な疑団を打発し、見性を得る方便なのである。公案は、徹底して疑われなければならない。疑団には、意識的な分別を容れる余地があってはならない。疑団とは、全体的な疑いの塊の意である。それを起こしやすい公案は、最初は「趙州無字」であることを強調していたが、60歳代の半ばになると自分自身が創作した「隻手音声」の公案が最もふさわしいと述べた。白隠の弟子宛ての手紙である多くの作品には、このような修行方法とその必要性を説明し続けるのである。しかし、まだまだここで満足してはいけない。留まる境界ではないという。

公案の修行が進めば進むほど、仏陀の境地を体験し、自分自身は仏陀そのものになるという。白隠禅師の教えの方針と完全性を表す文書は次のようなものであると思われる。これは、特別な人間のための修行方法ではなく、白隠自身の言葉を利用すれば、「僧俗男女ニ限らず、老幼尊鄙に依らず⁽⁶¹⁾」すなわちすべての人間のための修行方法である。

老衲は、三四十年前は、新到が来れば、まず「趙州無字」の公案を

与えていたのだが、どうも、「無字」では効果が少ないように思い、このごろでは「隻手音声」の公案を課している。

隻手の音を聞きとどけたかどうか点検するには、いくつかの雑則がある。[…] これらのすべてが、掌上を見るごとくはつきりしたときに、初めて、大円鏡智を得たことを認める。しかるのちに今度は、一切の音声を止めさせる。鳥獸、笛の声、鐘鼓の響きを止めよ、と。あるいは、「沖ゆく帆かけ舟を止めて見よ」とこれらのすべてが透過したときに、宝鏡三昧に入ることができる。これを諸法実相の觀ともいう。つまり、洞山五位の偏正三昧に同じである。見る我もなければ、見られる物もない、差別即平等、平等即差別であり、(臨濟のいう)「途中に在って家舎を離れず、家舎を離れて途中に在らず」というところである。この境地に至るならば、平等性智を得たことになる。

しかし、この平等というところに安住するならば、狐や狸が巢穴に閉じこもって睡るようなことになってしまう。[…] それから、正受老人がされたように、いくつかの古則公案を出す。[…] これらを一々透過して初めて、妙觀察智を得ることができるのである。

(これで終わりではない) さらに精神を激発して、(あらゆる法門、仏教ばかりでなく広く外典までも学び) 広く法財を集め、(これをわがものとして) 法を説いてゆかねばならない。大法施を行ずることによって、あまねくいっさいの衆生を利益し救済し、「上求菩提、下化衆生」を実践してゆくのだ。まことに貴ぶべきは、この「上求菩提、下化衆生」である。これを未来永劫にわたって倦まずたゆまず実践してゆく。この大いなるはたらきは、応ぜざることなく、到らざるところがない。この大いなるはたらきをするものを成所作智というのである。喜ばしいではないか、かくして四智(大円鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智)がそなわったのである。そして、この四智が円明になれば、ついに常樂我淨の四徳が具足するのである。それを大乘円頓の菩薩行という。それがまた愚堂国師の家風である⁽⁶²⁾。

『宝鑑貽照』による長い引用であるが、これは白隠禅師の根本的な教え

だと思われる。それだけではなく、白隠自身は自分の家風のやり方だという。さらに、上記の『於仁安佐美』巻の下の説明はほぼ同じ内容である。他の作品にもしばしば表れる。

白隠禅師による修行方法は、大悟の根本である大疑団、大死一番、大歎疑の体験を得るには「趙州無字」や「隻手音声」が必要であるが、そこで終わることなく、多くの古則公案と拶処を透過することによって、修行が深まり、最終的に『坐禅和讃』で言われている四智の円明まで至るべきである。

女性の問題に関わる平等と差別の相互関係を理解するには、四智と洞山五位の理解は欠かせないところである。筆者はすでにこの二つのテーマと白隠の関わりということについて論文を書いた⁽⁶³⁾ので、ここでは省略するが、改めて四智と五位の同等に注目したい。

白隠禅師の女性観について常盤氏は、白隠自身の『無門関』第四一則である「女子出定」の理解が大事と述べる⁽⁶⁴⁾。今回これについて論じるための余裕がないので、常盤氏の論文を参考にして頂きたい。しかし、この公案は女性観および差別と平等との関連について重要だと思われる。

山田無文老師は、この「女子出定」について『無門関』の提唱には、上記の引用の内容である四智のことを述べる。白隠の説明をより理解するには、役に立つと思われるので、引用する。

坐禅和讃に、「四智円明の月さえん」とあるが、仏の智慧には四つの面があると言うのである。第一が大円鏡智、大きな円い鏡のような智慧である。これが根本智である。鏡の中には、なんにもないから、富士山も入れれば、太平洋も入る。太陽も月も何千万の星も入る。何もかも入る。なぜ入るかと言えば、無だからである。われわれの心も鏡のごとく無だから、全宇宙がすべて入る。これを大円鏡智と名づける。

その鏡のような清浄無垢な心の前には、すべてが平等である。鏡の前には、富士山が大きくもなければ、石ころが小さくもない。金持ちも貧乏人も、大臣も乞食も、鏡の前には同じく現象にすぎない。すべて平等である。このすべてを平等に見ていく智慧を、平等性智と言う。

すべてを平等に受けいられるけれども、映る姿はそれぞれ、山は山、川は川、男は男、女は女で、決して混同されることはない。はつきり違わなくてはならん。このはつきり判断を下す智慧を妙観察智と言う。妙に観察する智慧である。しかも、眼はものを見、耳は声を聞き、鼻は匂いを嗅ぎ、舌はものを味わい、身体はものに触れて初めて差別の判断が下されるので、その五感のはたらきを成所作智と名づける。所作を成す智慧である。

この四つの智慧が、人間には誰にも本来そなわっておる。悟りを開けば、この四つの智慧が円明に自由にはたらくことになる⁽⁶⁵⁾。

白隠禅師の女性弟子のように当時の禅の道を歩んでいた女性たちの気持ちを表すことができるものとして、最後に、同じ時代に生きていた女性禅者であった飯塚染子（1667-1705）の『無門関』第四一則の解釈に書かれた和歌を引用したい。

そのかみの契りし儘を標にて法の道芝踏みも迷はず

昔、お釈迦様は、人生に苦悩する衆生を救おうと、お誓いになった。

かく言うわたくしも、その昔、禅の道によって救われたいと願った。

その時の誓いと決意は、お釈迦様とわたくしとの「默契」のようなものである。

だから、女性である自分は悟り得ないなどと一切迷うことなく、この禅の道をひたすら歩き続けよう。

わたくしは女性であると同時に、「人間」でもあるのだから⁽⁶⁶⁾。

最後に

本論では政女と大橋女という白隠禅師の女性弟子について調べた。以前に述べたお察と恵昌尼と共に四人にのぼる。しかし、白隠禅師の『年譜』

に記されていない他の女性弟子が存在していたと思われるので、白隠禅師の女性弟子について今後も研究を続ける予定である。

注

- (1) 特に次の論文が参考になった。町田瑞峰「白隠門下の女性禅者の消息」、『禅文化』第103号、1982年、77-89頁；町田瑞峰「白隠門下の女性禅者の消息—遊女大橋・信州伊那の三才女（さん女・清女・亀女）」、『禅文化』第105号、1982年、127-141頁；常盤義伸「白隠と女性」、『日本仏教学会年報』第56号、1990、153-166頁；常盤義伸「禅の女性観」、『仏教』第15号、1991、219-226頁；芳澤勝弘「白隠禅師仮名法語・余談（五）—お多福美人のこと—」、『禅文化』第167号、1998年冬、132-139頁；芳澤勝弘「白隠禅師仮名法語・余談（六）—遊女大橋こと慧林尼—」、『禅文化』第168号、1998年春、132-141頁。筆者は常盤義信氏から上記の自分の論文を送って頂いたこと、芳澤勝弘氏に多くのアドバイスとヒントを頂いたことに感謝を申し上げる。それに加えて、白隠の生涯に関わる情報を得るには、白隠伝の代表研究者である陸川堆雲氏の『白隠和尚詳伝』および秋山寛治氏の『沙門白隠』も欠かせない参考書であった。陸川堆雲『考証白隠和尚詳伝』山喜房仏書林、1963年。秋山寛治『沙門白隠』、秋山愛子、1983年。
- (2) 『白隠和尚全集』第一巻、龍吟社、1967年（初版発行1934年）、1-78頁。加藤正俊『白隠和尚年譜』、思文閣出版、1985年。芳澤勝弘編著『新編・白隠禅師年譜』、禅文化研究所、2016年。
- (3) 『白隠和尚全集』第一巻、105-148頁。能仁晃道編『白隠門下逸話選—荊棘叢談全訳注』、禅文化、2000年。
- (4) 荻野獨園『近世禅林僧寶傳』上・中・下巻、貝葉書院、1889年。能仁晃道訓注『訓読・近世禅林僧宝伝』全二巻、禅文化研究所、2002年。
- (5) 能仁晃道訓注『訓読・近世禅林僧宝伝』上巻、223-226頁。
- (6) 森大狂（慶造）『近世禅林言行録』、金港堂書、1902年。森大狂（慶造）『近世禅林言行録』、日本図書センター、1977年。
- (7) 森大狂（慶造）『近世禅林言行録』、197頁、208-213頁。
- (8) 森大狂『近古禅林叢談』、藏経書院、1919年。森大狂『近古禅林叢談』、禅文化研究所、1986年。
- (9) 同上、350-356頁。
- (10) 同上、352-354頁。

- (11) 小島文鼎『続禅林僧宝伝』八冊、貝葉書院、1938年。その内容は『訓読・近世禅林僧宝伝』にも含まれている。
- (12) 芳澤勝弘編著『新編・白隠禅師年譜』、178-179頁。原文は次の通りである。「比奈邑杉山氏寡婦名政。依脱公點發。參禪尤切。至忘身心。有兒日往。順朱墳墨。午時遺炊爨。兒還無飯。鄰人愍食之。一日兒還。政問曰。子。誰家兒。兒曰。阿娘何言乎。政肯諾復入三昧。如是數日而有省。便謁師呈所見。師以數段機緣詰之。一無凝滯。」『白隠和尚全集』第一卷、46-47頁。また、加藤正俊『白隠和尚年譜』、184頁。
- (13) 原文である。『白隠和尚全集』第一卷、46頁。また、加藤正俊『白隠和尚年譜』、184頁。
- (14) 加藤正俊『白隠和尚年譜』、166-167頁。
- (15) 『道元禅師全集』第一卷、春秋社、1991年、3頁。
- (16) 芳澤勝弘訳注『白隠禅師法語全集』第二冊、禅文化研究所、1999年、97頁。原文は次の通りである。「永平開祖ノ、自己ヲ運ンデ、萬法ヲ證スルハ迷イナリ、萬法來シテ自己ヲ證スルハ悟リナリ、身心脱落、々々身心、ト説カレタルモ、此ノ三昧ノ大略ヲ云ヘリ。」同上、301-302頁。時折、白隠による道元禅師の引用として、他には『於仁安佐美』巻の上を挙げられる。「道元禅師は『行持有らん一日は貴ぶべきの一日なり、行持なからん百年は恨むべきの百年なり』と言われたが、行持とは何か。それは上求菩提、下化衆生の方に他ならないのです。」同上、44頁。原文は、202頁。内容から判断すると、白隠は道元の教えを尊敬し、さらに深く理解していたということが分かる。
- (17) 同上、302頁。
- (18) 安永祖堂『笑う禅僧一「公案」と悟り一』、講談社、2010年、96頁。
- (19) 同上。また、『聖書』、日本聖書協会、2000年、137頁、を参照。
- (20) 芳澤勝弘編著『新編・白隠禅師年譜』、179頁。原文は次の通りである。「一日。雲山在師後偃臥。政來乞入室。山將避。師曰。母起。山臥自若。政人來。師拶曰。夢中西來意作麼生。政呈所見。師便休。政辭去。山問曰。適來是誰誰。師以實告。山嘆曰。我未見如彼作略純眞而不通風者。」『白隠和尚全集』第一卷、47頁。また、加藤正俊『白隠和尚年譜』、184頁。
- (21) 加藤正俊『白隠和尚年譜』、164頁。
- (22) 芳澤勝弘訳注『荊叢毒蕊』坤、禅文化研究所、2015年、277-278頁。原文は次の通りである。「佛日雲山和尚 道標高古、氣宇清閑。西航海撞著 古月黒光、擊碎佛心印。東還家透脱玄沙道底、拗折法窟牙。從是惱害諸

- 方枯木裏禪徒、或時描貌近鄰曲景上諸老、心交四十歳、別涙千萬行。其徒一兩肩、來請題畫像。眞是普光堂頭定中遊戲、贊印沙羅樹下睡裏狂言。贊語未成先春睡、夢中相對笑顏親。覺來老淚滿衣袖、七月廿二當午時。」同上、276頁。また、『白隠和尚全集』第二卷、245頁。
- (23) 芳澤勝弘訳注『白隠禪師法語全集』第十三冊、35頁。『白隠和尚全集』第六卷、236頁。
- (24) 芳澤勝弘訳注『白隠禪師法語全集』第十二冊、230頁。原文は次の通りである。「特（獨）り大勇猛の上土有て、一則難透の狼毒語を執て舊見を放下し、大疑團を起して、單々に參究して生蛇竹筒に入るか如くし。」同上、303頁。また、『白隠和尚全集』第六卷、146頁。
- (25) 能仁晃道編『白隠門下逸話選一荊棘叢談全訳注』、107頁。原文は同左、260頁。『近世禪林僧宝伝』のような後の書物には、『荊棘叢談』の伝記がほぼそのまま載せられているので、最後の文書は『荊棘叢談』の文章と同じである。能仁晃道訳注『訓読・近世禪林僧宝伝』上巻、224頁。森大狂（慶造）『近世禪林言行録』、213頁。森大狂『近古禪林叢談』、354頁。
- (26) これについて、竹下 ルッジェリ・アンナ「日本の禪宗における女性観—白隠禪師の場合—（1）」、『花園大学国際禅学研究所論叢』第九号、2014年3月、56頁。
- (27) 芳澤勝弘編著『新編・白隠禪師年譜』、330頁。原文は次の通りである。「歸路過平安城館世繼氏。池大雅來參。及度大橋女。』『白隠和尚全集』第一卷、60頁。加藤正俊『白隠和尚年譜』、233頁。
- (28) 芳澤勝弘編著『新編・白隠禪師年譜』、330-331頁。
- (29) 加藤正俊『白隠和尚年譜』、3-4頁。芳澤勝弘編著『新編・白隠禪師年譜』、xix頁。
- (30) 芳澤勝弘「白隠禪師假名法語・余談（六）一遊女大橋こと慧林尼一」、134頁。芳澤勝弘編著『新編・白隠禪師年譜』、331頁。
- (31) 『年譜』に関する原文は次の通りである。「本貫者江府公臣。某甲女。而食千石餘。父因事爲浪士。與其小弟俱寄食每家。終婁且貧。女教父母曰。贖我娼家。得時相遇。父母曰。估子自活。是畜生業也。設死不爲。女曰。是方便也。君如不爲。應當入死地。雖方便不及眞智。去難入道。亦非眞智耶。父母同之。遂送倡家。善書好和歌。待遇惟勤矣。女嘗思惟。我舊生官。養帷帳之内。使令婢子。而今墮這隊。是什麼狀。日往月來。思念漸積而感沈痾。醫亦至拱手。』『白隠和尚全集』第一卷、60-61頁。加藤正俊『白隠和尚年譜』、233頁。

- (32) 芳澤勝弘編著『新編・白隠禅師年譜』、332-333頁。『年譜』に関する原文は次の通りである。「汝一身除見聞覺知。別無作底者。四者有主。汝行住坐臥。見者何物。聽者何物。切切返觀不怠則。本具佛性。忽然現前。到這箇田地。是便解脫苦界要徑也。』『白隠和尚全集』第一卷、61頁。加藤正俊『白隠和尚年譜』、233頁。
- (33) 芳澤勝弘編著『新編・白隠禅師年譜』、333頁。『年譜』に関する原文は次の通りである。「女謹稟命。單單潛修。延享間。狂雷震洛地。一日隕二十八所。女素忌雷。垂帳被衾。令小婢從女護左右。忽猛省堅坐。雷聲遽震。撲然墮庭中。大橋仰顛絕氣息。少焉蘇。見聞幾乎異平常。雖欲得師證。欲染境中未由也耳。』『白隠和尚全集』第一卷、61頁。加藤正俊『白隠和尚年譜』、233頁。
- (34) 芳澤勝弘編著『新編・白隠禅師年譜』、610頁。
- (35) 芳澤勝弘編著『新編・白隠禅師年譜』、331-333頁。
- (36) 観音経事典編纂委員会編『観音経読み解き事典』、柏書房、2000年、252頁。
- (37) 金森天章訓読『法華経』、東方出版、1985年、424頁。原文は、『大正新脩大藏経』巻9、大正新脩大藏経刊行会、昭和48年、57頁b。
- (38) 芳澤勝弘「白隠禅師仮名法語・余談（六）一遊女大橋こと慧林尼一」、134頁。また、芳澤勝弘編著『新編・白隠禅師年譜』、610頁。
- (39) パトリシア・フィスター『世の女性画家たち—美術とジェンダー』、思文閣出版、1994年、130頁。
- (40) 同上。
- (41) 伴蒿蹊『近世畸人伝』、岩波書店、2015年（第18刷発行）、73-75頁。
- (42) 同上、157-162頁。
- (43) 同上、238-242頁。
- (44) 同上、73-75頁。
- (45) 町田瑞峰「白隠門下の女性禅者の消息—遊女大橋・信州伊那の三才女（さん女・清女・亀女）」、127頁。
- (46) 芳澤勝弘「白隠禅師仮名法語・余談（六）一遊女大橋こと慧林尼一」、139頁。解説については、同上、139-140頁。また、芳澤勝弘編著『新編・白隠禅師年譜』、336-337頁、を参照。
- (47) 町田瑞峰「白隠門下の女性禅者の消息—遊女大橋・信州伊那の三才女（さん女・清女・亀女）」、130-131頁。
- (48) 加藤正俊『白隠和尚年譜』、237頁。
- (49) 『白隠禅師法語全集』第十三冊、333-334頁。『白隠和尚全集』第六巻、

340頁。

- (50) 『白隠禅師法語全集』第十三冊、319-320頁。『白隠和尚全集』第六巻、333-334頁。
- (51) これについて、芳澤勝弘「白隠禅師仮名法語・余談（六）一遊女大橋こと慧林尼一」、140-141頁を参照。
- (52) 芳澤勝弘編著『新編・白隠禅師年譜』、336頁。
- (53) 『禅学大辞典』、大修館書店、789-b頁。
- (54) 同上。
- (55) 『白隠禅師法語全集』第十二冊、5頁。原文は次の通りである。「蓋し彼の因地下の歡喜は如何して得べきぞとならば、大疑の下に大悟ありと申して、唯今、此文を披賢し、或は笑ひ或は談論し、萬縁に應じて、夫れへに働きもて行く底、是れ何物ぞ、是れ心なりや、是性なりや、青黄赤白なりや、内外中間に在りやと、是非々々一回分明に見届けずば置くまじきぞと、十二時辰三 [の] 四威儀、たけく精彩をつけ、間もなく勵み進み侍らば、いつしか妄想思量の堺を打越へ、前後際斷（底）の工夫現前して、男にあらず女にあらず、賢にあらず愚にあらず、生ある事を見ず、死ある事を見ず、唯一向、（心上）、空洞々地虚潤々地にして、晝夜の分ちを見ず、心身ともに消へ失する心地は幾たびも有之事に候。」同上、36-37頁。『白隠和尚全集』第五巻、320-321頁。
- (56) 原文である。『白隠禅師法語全集』第十二冊、36頁。
- (57) 『禅学大辞典』、大修館書店、795-b頁。
- (58) 『白隠禅師法語全集』第二冊、87頁。原文は次の通りである。「熟へ顧フニ、參玄ノ上士ハ大死一番、命根斷底ノ時節ヲウルヲ以テ貴シトス。是レヲ天涯ニ手ヲ撒シテ、絶後ニ再ビ蘇ヘル底ノ時節ト云フ。」同上、284頁。
- (59) 同上、88頁。原文は次の通りである。「此ノ寶處ニ到ラント欲セバ、一氣ニ進ンデ退カザルヲ至要トス。往々ニ話頭ヲ參究シ、自己ヲ究明して、寶參功積モリ、潛行カラ充ツル則ンバ、萬里ノ層水裏ニ在ルガ如ク、身心モ話頭モ、一時ニ打失シテ、無底ノ黑暗坑に墮イルガ如クナル時、多クハ乍チ恐怖ノ心ヲ生ジテ、一步モ正ニ進ム事得ズ、頭ヲ搔イテ懊惱ス。」同上、284-285頁。
- (60) 同上。原文は次の通りである。「若シ果シテ然ラバ、縦イ無量劫數ヲ歴ルトモ、歡喜ノ眉ヲ開ク事能ワジ。殊ニ知らズ、是レハ斯レ百尺ノ竿頭ニ一步ヲ進メテ、十方刹土ニ全身ヲ現ズル底ノ刹那ナル事ヲ。」同上、285頁。

- (61) 同上、288頁。
- (62) 芳澤勝弘訳注『荊叢毒蕊』坤、1143-1145頁。原文は次の通りである。
「山野三四十年前。勸人參趙州無字。中謂無字出人難。參到死不得力多。近勸令聞隻手聲。到聞隻手有穿鑿。[…] 如上如見掌上時。始許得大圓鏡光。而教一切音聲止。鳥獸簫笛鐘鼓響。或令遠浦歸帆止。如上逐一透過後。却入彼寶鏡三昧。或名諸法實相觀。同五位偏正三昧。全無能見無所見。今時那邊總一般。途中家舍無隔礙。此觀若人得成就。即是平等性智人。若住著平等寶處。恰似狐狸睡舊窠。[…] 自是疑數段因緣。如最初正受授與。[…] 從頭一一透過後。始許得妙觀察智。於此轉激發精神。廣聚法財行法施。普利濟多少羣生。修上求下化正因。可貴彼上求下化。涉塵點劫不倦怠。大機圓應妙無方。名之爲成所作智。歡喜四智漸具足。須期四智圓明時。終是得四德具足。此是圓頓菩薩行。又是國師舊家風。」
同上、1141-1142頁。または、『白隱和尚全集』第一卷、261-262頁。
- (63) 竹下 ルッジェリ・アンナ「白隱の唯識観—『四智辨』を通して—」、『花園大学国際禅学研究所論叢』第二号、2007年、151-179頁。アンナ・ルッジェリ「白隱禅師における洞上五位の一考察」、『花園大学禅学研究』第79号、2000年、199-221頁。アンナ・ルッジェリ「白隱と現代の公案の問題—『十牛図』および『洞山五位』を通して—」、大阪府立大学大学院『人間文化学研究集録』第10号、2000年、59-69頁。
- (64) 常盤義伸「白隱と女性」、157-158頁。常盤義伸「禅の女性観」、224-225頁。
- (65) 山田無文『無文全集』第五卷、禅文化研究所、平成16年、677頁。
- (66) 島内景二『心訳「鳥の空音」—元禄の女性思想家、飯塚染子、禅に挑む』、笠間書院、2013年、248-249頁。

